訂正中等國語讀本 落合直文編 卷九

375.9
Oc9
資料室

30298
教科書文庫
3
810
41-1902
200030
1975
M35
1902

資料室
375.9
Oc9
廣島大學圖書之印
敬光學舍圖書之章
廣島大學
教
21602
圖書

訂正中等國語讀本 卷九目次

一、海と日本文學その一……一
二、海と日本文學その二……五
三、海と日本文學その三……八
四、壇の浦その一……一二
五、壇の浦その二……一七
六、漁村……二三
七、水蓼……二五
八、丹波少將……三五
九、自然のあはれ二篇……四四
一、月と露……四四

二、花と月……四五
一〇、法性寺忠通……四六
一一、むろの八島（短歌）……五一
一二、鉢の木その一……五四
一三、鉢の木その二……五八
一四、鎭西八郎爲朝その一……六三
一五、鎭西八郎爲朝その二……六八
一六、戰爭と文學……七二
一七、飢饉……七九
一八、人生の四季……八四
一九、浮世のさが二篇……九四
一、人のなき跡……九四

二、常ならぬ世……九六
二〇、古羅馬……九八
二一、寂光院……一〇四
二二、こぞのきをり（短歌）……一〇九
二三、待賢門のいくさその一……一一三
二四、待賢門のいくさその二……一一八
二五、待賢門のいくさその三……一二三

卷九目次終

廣島大學圖書之印

訂正中等國語讀本卷九

一、海と日本文學 その一

わが邦は、四圍、皆、海にして、繁華殷富なる都市も、また、海岸にれほく、從ひて、人口の配付も、いにしへより、海岸にれいて、稠密なりしこと、疑ふべからず。されば、わが邦の人民のごときは、れのづから、海と相離るべからざる直接間接の關係、すくなからず。これによりて、考ふるに、わが邦の文學も、また、れのづから、海にすくなからざる關係をもつべき理なり。たとへば、潮來り、潮去る、れもしろさをよめる歌、または、晴れたる

日の、たたしむべく、風たてる日の、れそるべき海原のさまを
たるしゝ文、或は、また、浪のはてよりのぼる日の、うるはしさ、
島山のあなたにれつる月の、あはれさなどを、寫しゝもの、い
さましき舟子が上を傳へたる小說などは、わが邦の文學に、
いと、れほく、見ゆべき理ならずや。

さるに、事實は、いたく、これに反せり。所謂、和歌といふもの
には、海に關するもの、甚だ、すくなし。たまたま、これなきにあ
らずといへども、れほくは、海をれそれ、海をいとへるがごと
きものにして、海中に立てる國民の歌としては、ふさはしか
らぬことゝやいはむ。試に、古今集以後の勅撰の歌集、また、一
家の歌集の類を、手にして、漁夫、舟人の類をよめる歌をあら

ため見よ。その世わたりのあやふきを、悲み憐める歌のみ、多
く、かの、萬里の海を、わが路にして、八方の風を驅使する舟人
の意氣をよめる歌、または、千尋の波の底より、呑舟の大魚を
得て、舷頭に、ひとりうそぶく、漁夫のたのしみを描ける歌の
如きは、いくばくもあらざらむ。

小說は、源氏物語、宇津保物語のむかしより、海としいへば、
恐るべきものゝやう、描けるがれほし。風にあひて、船の破る
ること、または、思はぬかたに、吹き流さるゝことなどは、好み
て、描けることとなるが、その物語は、大かた、皆、机の上にて、作者
が、海に對する自己の恐怖心より、捻り出したるものゝみ。一
も、まことらしき狀態を描きて、海上の光景を、讀者に感ぜし

めたるものなきなり。されば、これ等の物語は、女子をして、海のれそるべきことを、空想上に、深く、思はしむる外には、何の結果をも遺すことなし。古來の小說、すくなからずといへども、海員の生活、船上の旅客の眞情等を、書きあらはしゝもののごときは、殆ど、あらざるなり。余は、實に、ある一章にすら、海に關する記事の、やゝ、屬目を値すべきものを含めるを、さし示す能はざるなり。謠曲、淨瑠璃も、また、然り。作者が、海に對する恐怖心の外には、何事も、見出し得べきものはなしといふも、不可なきに似たり。もしも、志ひて、これありとせば、そは、海神、龍王等に對する迷信の事實ならむのみ。

二、海と日本文學 その二

翻つて考ふるに、わが邦と海との地理上の關係に、文學の相應せざることは、實に、はなはだしけれど、これによりて、直に、わが邦の歌人、小說家、および、謠曲、淨瑠璃の作者等を、思想、偏僻なり、眼孔、狹小なり、技倆、拙劣なりとなすべからず。いかにとなれば、その邦の文學は、その邦の地理に相應して、發達繁榮すべきものなると共に、また、實に、その邦の歷史に相應して、發達繁榮するものなればなり。されば、わが邦と海との、地理上の關係を考ふるごとく、わが邦と海との、歷史上の關係をも、また、考へずば、我が邦の文學を論ずるにれいて、その判斷の中正を得ざるべきなり。さて、わが邦と海との、歷史上

の關係は、如何。

わが邦の文學の、わが邦と海との、地理上の關係に相應せざるいはれは、我が邦と海との、歷史上の關係を考へて、はじめて、その解釋を得べきなり。德川氏は、大船を造ることを禁じ、海外諸國と交通することを欲せざりしにあらずや。陸上の交通、驛傳の諸法は、甚だ、整理せられしにかゝはらず、海上の交通、舟運の利は、輕視せられて、豪膽なる商人等の經營の外には、政府も、士人も、殆ど、指を、海事に染めず。諸侯の參勤交替のごときも、皆、必ずその陸路を取りしごときは、最近三百年の歷史にあらずや。舟子は、志州の鳥羽より、豆州の下田にいたる航路を、非常の難關と思ひ、旅客は、中國諸港より、讃州

多度津にいたる短距離の航海を、大冒險のごとくれそれ、一般の人民は、大罪人と舟子との外には、海を、龍神、海坊主、船幽靈等の巢窟と信じたりしは、德川氏が、わが邦民をして、壺中に遊樂せしめし政治の結果にあらずや。かくのごとき歷史上の狀態によりて、考ふる時は、わが邦の文學と海との關係は、地理上には、相應せざるも、實に、よく、歷史上には、相應せりといふべきなり。

また、德川氏以前にれいては、足利氏が、京都に據りたる、桓武帝が、山城の山間に、都を定め給ひたる、猶、その以前にれいても、大和の地に、都を定められたる等は、いちじるしく、わが邦の文學をして、海と相遠ざからしめたりといふべきにあ

らずや。元祿以前のわが邦の文學は、國民の文學といはむよりも、むしろ、貴族の文學といふべきものなれば、その國都の、海邊を離れて、山間にかくるゝにいたりしは、實に、都府の住者たる貴族をして、海に遠ざからしめ、隨ひて、また、我が邦の文學をして、海に遠ざかるに至らしめたる大原因なりといふべきにあらずや。

三、海と日本文學 その三

かくのごとくにして、奈良、京都の文學者、すなはち、わが邦の文學の、父たり母たる位置に立てる文學者よりして、海といへば、須磨、明石、もしくは、和歌の浦の外は、知らぬがごとき、智識感情を相承せしを以て、その兒孫たる文學者の、今にいたるまで、海に關する篇什の、なに一つ、わが邦の文學史を飾るに足るべきものを出さゞるも、敢て、あやしむに足らずといはむ。

都の、大和にありし間、遣唐使といふものゝ存せしは、萬葉集をして、いさゝか、古今集よりも、海に關する歌の包含をほからしめたり。古今集を讀み終へて、溯りて、萬葉集を讀まば、その集の作者等が、かの集の作者等より、海といふものに志たしきことは、何人といへども、認め得るところならむ。これ、また、海に對しては、わが邦の文學が、わが邦の歴史に相應せる一證なり。

古事記　神代より推古迄ノ事三卷アリ　稗田阿礼　和銅五年成就
日本書紀　神代より持統帝迄三十卷アリ　舍人親王奏上養老四年脫稿

萬葉集以前は、載籍、甚だ、乏しければ、吾人をして、精細確實なる斷案を下す能はざらしむれども、古今集を拋ちて、萬葉集に就けるが如くに、萬葉集を讀み終へて、古事記、日本書紀に見えたる傳說、歌謠を見る時は、吾人は、海國の民として、こに、一種の愉快を感じ、わが邦の上古の文學は、歷史上にも、地理上にも、よく、相應して、わが祖先等が、海に對する思想、感情、及び、智識の、決して、萎縮的ならざりしことを知るなり。

わが邦の地理上の狀態は、わが邦の文學をして、海にまたしましむべき因をなせり。まかるに、歷史上の狀態は、上世を除きては、わが邦の文學をして、海に遠ざからしむべき因をなせり。かくのごとくして、わが邦の文學は、海國の文學とし

編輯　仕ヲアリ又ハ文ヲ書物ヲ作ケリ

ては、甚だ、相應せざる狀態をあらはすにいたれり。されども、これ、實に、歷史上の關係の壓逼によるものにして、わが邦人、本來の性質、海洋に對して、怯懦なるにあらず、また、わが邦の、歌客文人の、思想の偏僻、眼孔の狹小、技倆の拙劣なるより、かくのごとくなれるにあらざるは、歷史の繫縛を被らざりし時代の人の手になれる記紀をよみても、明なることなり。

古事記　日本書紀

海中に、國をなせるわが邦人に、呑海の氣象なくば、いかで、世界に、勇を稱するを得む。地理上の狀態は、千古かはらず、歷史上の狀態は、雲烟去來す。今や、わが邦は、山間のせまき平地にやすきをぬすみしが如き、昔日の愚をば、ふたゝびせず、日に、月に、海にまたしむこと、多くなれり。海國の所產たるに相

應する文學は蓋し、今日以後に成らむか。（幸田幸行著調言）

四、壇の浦その一

さるほどに、源氏の兵ども、いとゞ、力を得て、平家の船に、漕ぎ寄せ、漕ぎ寄せ、亂れ乘る。遠きをば射、近きをば斬る。たて横、散々に攻む。水手、かんどり、櫓を棄て、櫂を捨てゝ、船を直すに及ばず、射伏せられ、切り伏せられ、船底に倒れ、水の底に入る。中納言は、女院、二位殿などの乘り給へる御船に參られたりければ、女房たち、「こは、いかになり侍りぬるぞ」と、宣ひければ、「今は、ともかくも、申すに、ことばは足らず。かねて、思ひ設けし事なり。めづらしき東男どもをこそ、御覽ぜんずらめ」とて、うち笑ひ給ふ。手づから、船の掃除して、見ぐるしきものども、海に取り入れ、「こゝ拭へ、かしこ拂へ」など、のたまふ。「さほどの事になり侍るなるに、おづかなる、たはぶれごとかな」とて、女房たち、聲々、をめき叫び給ふ。

二位殿は、今はかぎりと、見はて給ひにければ、練色の二衣、ひきまとひ、白袴のそば、高く挾みて、先帝を抱き奉り、帶にて、わが身を結びあはせ參らせ、寶劍を腰にさし、神璽を脇に挾みて、ふなばたに臨み給ふ。先帝は、八つにならせ給ひけり。御年のほどよりは、ねびとゝのほらせ給ひて、御形、あてに、うつくしく、御髮、黑く、ふさやかにして、御背にかけ給へる御貌、たぐひなくぞ見えさせ給ひける。御心迷ひたる御氣色にて、「こ

は、いづこへ行くべきぞ」と、仰せられけるこそ、悲しけれ。二位殿は、「兵どもが、御船に、矢を參らせ候へば、別の御船へ行幸なし參らせ候ふ」とて、

いまぞ知る。みもすそ河の、流には、
涙のあたにも、みやこありとは、

と、のたまひもはてず、海に入り給ひければ、八條殿、同じく、つづきて、入り給ひにけり。國母建禮門院をはじめ奉りて、先帝の御乳母帥典侍、大納言典侍以下の女房たち、船の艫舳に臥しまろび、聲をとゝのへて叫び給ふも、れびたゞし。浮きや上らせ給ふと、あばしは、見奉りけれども、二位殿も、八條殿も、深く、沈みて、見え給はず。昔は、一天の主として、殿をば、長生と祝ひ門をば、不老と名づけしかども、今は、雲上の龍下りて、忽に、海中の鱗となり給ふこそ、悲しけれ。あはれなるかな、花にたとへし十善の御粧、無常の風に匂を失ひ、悲しいかな、月にかがやきし萬乘の玉體、蒼海の涙に影を沈めはすることを。無常、もとより、さだめなし。有待、誰かは、たのみあるなれども、清涼、紫宸の玉臺を振り捨てゝ、鬪戰兵革の船中に行幸して、未だ、十歳にだにも、滿じ給はぬ御齡に、忽に、波の底に入り給ひけむ、あはれといふも、れろかなり。女院は、後れ奉らじと、御燒石と御硯の箱とを、左右の御袂にやどし入れ、御身を重くして、つゞきて、海に入らせ給ひけるを、渡邊源次郎兵衞番が子に、源五馬允昵といふもの、いそぎ飛び入りて、かづきあげ

奉りけるを、昵が郎等、熊手を下して、御髪をから巻きて、御船へ引き入れ奉る。やよひの末の事なれば、藤重の十二ひとへの御衣を召されたり。翡翠の御髪よりはじめて、皆、ほたれはしますぞ、御いたはしき。昵は、もしやの時とて、鎧唐櫃の底に持たりける唐綾の白小袖、一重取り出して、女院に参らせたりけるは、えびすなれども、なさけあり。昵は、近くは、参り寄らず、程を隔て、畏りて、「君は、女院にてわたらせはするか」と、度々、たづね申しければ、御覽じなれぬえびすのありさま、れそろしく、思し召しけれども、御ことばをば出させ給はず、二度、うちうなづかせ給ひけり。

五、壇の浦 その二

源氏の郎等に、後藤三範綱は、平家の船に飛び入りて、弓をば捨て、打物抜いて、走り廻りけるを、越中次郎盛嗣、寄せ合せ、組んで重り、上になり、下になり、船中を、五ころび、六ころびしければ、互に、刀を抜く隙もなかりけるところに、盛嗣を助けむとて、悪七兵衛景清、範綱をば刺してけり。前能登守教經は、元來、心剛に、身健にして、進む事ありて、退く事なし。軍敗れぬと、見えければ、思ひ切り、死生知らずに振舞ふ。これぞ聞ゆる能登守とて、われさきに、われさきにと、爭ひて、かゝりけれども、少しも、面も振らず戰ふ。矢ごろに廻るものをば、さしつめ、さしつめ、射けるに、更に、あだ矢なし。近づくものをば、引き寄

せ、提げて、海へ投げ入れければ、面を向け難し。

前新中納言知盛卿、これを見て、「よしなき事ま給ふものかな。このともがらは、皆、歩兵にこそ侍りぬれ。あながちに、目にたて給ふべきにあらず。自害をもま給へかし」と、のたまへば、さては、九郎冠者に組めとにこそ。それは、存ずるところなり。いかゞはせむと、伺ひ廻るところに、判官の船と、能登守の船と、すり合せて、通りけり。能登守、然るべしとて、判官の船に乗り移り、兜をば脱ぎ棄て、大童になり、鎧の袖、草摺ちぎり捨て、輕々と、身をまたゝめて、いづれ九郎ならむと、馳せめぐる。判官、かねて、存知して、とかく、違つて、組まじ組まじと、紛れ行く。さすが、大将軍と覺えて、鎧に、小長刀突いて、武者一人あり。能登守、目をかけて、「軍將、義經と見るは、僻目か。故太政入道の弟、門脇中納言教盛の二男に、能登守教經」と、名乗り、にこと笑ひ、飛びかゝる。判官は、組んではかなはじと思ひて、尻足踏んでぞ、やすらひける。大將軍を組ませじとて、郎等どもが、立て隔て、立て隔てまけれども、「除け、やつばら、ものものし」とて、海の中へ踏み入れ、取り入れ、つと寄る。既に、組まむとまければ、判官、早業、人にすぐれたり、小長刀を脇に挾み、さしくゝりし弓たけ二つばかりなる隣の船へ、つと飛び移り、長刀取り直して、ふなばたに、にこと笑ひて、立ちたりけり。能登守は、力こそすぐれたりけれども、早業は、判官に及ばねば、力なくして、船に留り、「あゝ飛びたり、飛びたり」と、ほむ。その後、能登守、今をか

ぎりと、狂ひ廻りければ、面を向け難し。こゝに、安藝太郎時家といふものあり。阿波國の住人、安藝大領といふものが子なり。三十人の力もちたりと聞ゆ。郎等二人あり。同じく、三十人づつ力あり。時家、二人の郎等にいひけるは、「われら三人、心を一にして組まむには、鬼神といふとも負くまじ。能登殿、強しといふとも、やは三人には勝ち給ふべき。三人取つて合すれば、九十人が力なり。わたくしの力業は、人の證據にたゝず。能登守に組んで、力をも人に知らせ、剛の名をも極めむと思ふは、いかに」と、いへば、郎等ども、「仔細にや及ぶべき」とて、三人、一度に、鎹を傾け、打つてかゝる。能登守は、源氏の郎等に、名もあり、力あればこそ、教經にはかゝるらめ。これぞ軍の最後なると、思ひければ、ぢづぢづと、相待つところに、三人、鼻をならべ、すきまもなく、つと寄る。一人をば、海中へ、にうと蹴入れ、二人をば、左右の脇にかい挾んで、一ぢめぢめて、「いざ、れのれら、教經が御伴申せ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」とて、海の底へぞ沈みける。

前平中納言教盛、同新中納言知盛は、一所にれはしけるが、伊賀平内左衞門を召されて、「いかに、家長、見るべき事は見つ。先帝をはじめ參らせて、一門の人々、自害し、海に入りぬ。今までも、かくあれば、つれなき命を惜むに似たり。大臣殿は、いかになり給ひぬるやらむ」と、問ひ給ふ。家長、涙を流して、「大臣殿、右衞門督殿二人は、一度に、海に入り給ひたりつるを、敵、熊手

にかけ奉りて、二所ながら、引き上げ取り參らせ候ひぬ」と、申しければ、知盛卿は、「あな心う、など、深くは、沈み給はざりけるぞ」と、二度、のたまひて、涙を、はらはらと流して、「今は、何をか見聞くべき。家長、日ごろの約束は、いかに」と、仰せられければ、「今更、君にはなれ奉りて、いづちへ行くべきに候はず。御伴なり」と、申せば、知盛卿、世にうれしげに思ひて、平中納言教盛卿と、鎧脱ぎ捨てゝ、西に向ひ、念佛申して、兩人自害せられければ、有國、家長以下、侍八人、同じ枕に自害して伏しぬ。「あはれ、この人に、世を譲りたらば、たとひ、運のきはみなりとも、都にて、いかになり給ひなまし」と、惜まぬものはなかりけり。

赤旗、赤符、海上に充ち滿ちて、紅葉を風に吹き散したるが

如し。海水も、血に變じて、渚々に寄する波、薄紅にぞ流れける。主を失へる船は、風に隨ひ、潮に引かれて、越路の雁の、行を亂るが如く、膚をはなれたる衣は、水に浮き、波にあらそうて、蜀江の錦の色を洗ふかと疑はる。玉樓金殿の昔の榮華、船中の浪の底、今のありさま、思ひならべて、あはれなり。（源平盛衰記）

六、漁村

あまの住家ばかり、あはれなるものはなし。いと、便なき海邊の、風もたまらぬ松陰などに、たゞ、かりそめに造りたる藁屋どものさま、浪うち寄せなば、やがて、流れも失せぬべう、いと、はかなげに見ゆるを、繪にかきすさびたるなどは、なかな

かに、をかしきものから、さて、住みなば、なに心地かせましと、思ひやるだに、心細し。夕つかたなど、年老いたる男子の、手がらみしたるが、磯邊に立ちて、「今日は、いと、遲くもあるかな」など、いひつゝ、沖の方をまぼり居り。うまごどもにやあらむ、眞沙の上を走りありきつゝ、遊び居たるに、入日さしたる島かげより、三つ二つ、歸り來る舟の、機ひきをりて、ほこらしげなるを、老人、待ちえ顔に、うちほゝゑみたるは、さち多かりしにやと見ゆ。汀に寄せて、とび下るゝまゝに、網くりよせなど、とかくしつゝ、のゝしるに、男も、女も、あまた、いで來て、大なる籠に、魚ども取り入れつゝ、擔ひもて行くさま、さはいへど、にぎはしげなり。くゞつめく物もて來て、ちひさき魚、三つ四つ、こ

ひもて行く童などもあり。すべて、人、れほく、たちこみ騷ぎて、舟のあたり、かしがましく、さしよりて、のぞくべうもあらず。いと、長き網の、渚にかけほしたるを、くりためて、とり入れなど、やうやう、ちづまりゆけば、こなた、かなた、火ともしたるすきかげ、壁もあらはにて、いと、あはれに見ゆ。夜、やどりて見れば、浪風の響、枕をゆすりて、つゆ、まどろまれず。曉がた、隣の家、目さまして、なりはひの事どもなるべし、あやしう、聞き知らぬ事どもを、れのがじし、聲高に、いひかはしたる、げに、あまのさへづり、めづらしうも。をかしうも。（中島廣足著櫃園文集）

七、水蓼

天保の八年といふ年の、夏の頃、世の中の、はしたなきわたらひわざにつきて、上道郡なる、龍口山の麓に、日毎に、通ふ事ありけり。まだきより、起き出でつゝ、かへさは、いつも、ひるすぐるほどなり。今日は、六月の望の日なれば、暑きこと、又、いふべくもあらぬに、いつもの如く、起き出でて、笠の紐、結びなどするほどに、父の命の、のたまふやう、「この暑き日にさらされて、一里にあまれる道の程を、歸り來むには、忽に、あしき氣を蒙りて、重き病もいで來なむを、蓼てふ草ぞ、さる氣を拂ふなると、昔より、人もいひ、まことに、志るしあるものなれば、これ持ちて、行けかし」とて、御みづから、門邊なる蓼の、いさゝかばかり、穗に出でたるを、よき程に、つみとらして、賜りしを、何ば

かりの事とも思はざりしかど、たゞ、みけしきあしからむと思へば、さるれもゝちもせで、袖にして、出で行きつ。

かしこのいとなみはてゝ、歸り來るに、この頃は、日を經て、雨降らざりしかば、地さへさけて、照りつゞきたるけの、いとどしくまさりゆき、行手の道芝も、志なえよられ、田の面にすだく蛙だに、こゝかしこの隅々にかくれて、息つき居たる程なれば、暑き事、いはむ方なし。小川の塘をたどり行く程に、額の汗を拭ふとて、袖なる手拭をとうでけるにつきて、この賜りつる蓼の穗の、いたう志をれてぞ、出できたる。思へば、いとも、かしこかりけり。人の親の心ほど、よにも、あはれに、くまなくたらひたるものはあらじ。たけだち、人なみになれる子の、

はつかなる道のほどの上をさへ、御心に、深く、かけ給ひて、この蓼までも、賜りつる御心は、よる光るらむ玉は、ものかは、いかならむ寶位にも、たぐふべきものは、あらずなるを、かたじけなしとも、思ひたらず、なかなか、老人のならひとさへに思ひあざみて、かく、志なぶるまで、忘れはてたる心こそは、あさましなどは、愚にて、われながら、いたう、いぶかしけれとさへ思ふに、いとゞ、涙のはふり落ちて、かしこうも覺えければ、ひとつ、ひとつ、ひきのして、あまたゝび、れしいたゞき、半を分ちて、うち食ひつゝ、

夏の日の、あつきめぐみを、水蓼の、
ほとほとと忘れ、はつべかりけり。

と、いふ時、涙、さらに、さと、ほとばしり出でて、とゞまるべくもあらず。道ゆく人の、あやしとや思ふらむと、笠ゆりかたぶけて、れもてをかくしつゝ、なほ、つらつら、來し方を思ひつゞけ行くに、七つといひける年の秋、母の命の、世を去り給ひし後は、この一所の御陰にかくれて、あまたの年月を、思ひのまゝに、人となりけるそのほどの御いつくしみは、いかばかりなりけむ、濱の眞沙にも、よみなぞらへつべしやは。さるを、つゆ、報い奉らむとは、思ひもかけず、水し女一人だに、えつかはぬ家にすまへば、朝な夕なれのづからに、馴れまゐらせて、たちふるまひのなめげなるは、さるものにて、くだくだしう、苦しげなる家の内の事どもをさへ、うちまかせ奉りれきて、猶、心

ゆかぬをりをりは、「いかで、かうは」など、うちつぶやき、御性として、酒を呑むことを、こよなう、好み給へば、れのづから、また、怠り給ふことの、なきにはあらぬをりなどもあれば、なまさかしげに、諫め奉りなどもけるは、すべて、いかなる、ひがひがしき心なりけむ。やまと、もろこしの人の子の、あはれなる例にひける事どもを、書にも見、人にも聞けば、身をなきものにして、親のこのましう思給へるかたに、走り惑ひたりとこそ、いづれも、いづれも、傳へにたれ。せめて、さばかりならずとも、など、さまざま、悔しうかきみだりて、うつし心もなきまでに、音にたてゝ、よゝと、うち泣かれぬ。人の、いたう、のゝしり騒ぐ聲に、心づきて見れば、足もともれぼえで、早くも、御野川の堤

に來にけり。

わたし舟、待つほどに、木かげに、やすらひて、眺めやれば、鱒といふ魚の、今年は、殊に、多かなりとて、里人ども、集りて、網を引きつゝ、捕ふるなりけり。常にはめづらかなるものなれば、懷なりける錢、のこりなくとり出で、中に、大きやかなるを買ひとりて、藁に包みて、もて歸り來りつれば、父の命の、待ちつけれはして、「今日は、いと、早かりしな。暑きに、疲れたらむを、慰へ」など、例の如く、のたまふにも、この永き日を、只、御身一人にて、なす事もなく、日毎に、待ちつけ給ひぬるは、いかばかり、わびしうれはしけむと、思ふに、まづ、胸、つと、ふたがりて、ものもいはれず。からうじて、まぎらはしつゝ、かの魚をとり出で、燒

きもし、なますにもして、さて、奉らむと思ふ時「いかばかり、うるはしき饗なりとも、酒なくては」と、常に、のたまひしをと、思ひ出づるに、買ふものあらざれば、さらぬやうにて、市に出で行き、單衣一つ、賣りものして、いさゝかの酒を買ひとり、德利といふものに入れて、みづから、提げて走り歸り、「今日は、御野川にて、鱒、いと、さはに、取れ侍りしが、めづらかに、覺え侍るまに、買ひもて歸れり。また酒も、いさゝか、買ひれき侍るを、めし給ひなむや」と、いへば、「めづらかなり。とく、もて參れ」と、のたまふまゝに、めしよせて、「こはいかなる樣して、その里人は、捕ふる」など、いといたう、忿みまけ給ひて、れもほす事もなげに、のたまふにぞ、「志かぞかのわざして、とり侍る」など、うち語ら

ひつゝ、盃とり出でて、勸め奉るうちにも、常にしも、かくて、あらむよしもがな。先つ年、なやましうせさせ給ひたるけにや、御年の程よりは、いたう、くつをれ給ひて、いと、弱うれはするものを、御心のまゝに、樂み給はむ道も、絶え果てたるこそ、いとも、かしこく、悲しけれ。人なみなみの貧しさならば、猶、いかばかりも、せむやうのありなむを、衰へはてたる家の內は、なに一つ、行ふべき業もなきぞ、悲しくも、又、悔しかりける。よし、さりとも、ほだしとならむ妻子どものなきこそは、なかなか、心安けれ。ありとあるもの、竊に、ものして、力のかぎり、つかうまつらむ。れのが身一つの上は、いかならむ巖の中にも、過さば、過しはてざらめやなど、思ふにも、魂消ゆる心ちして、ほれ

たるやうにて、つい居たるを、みそなはして、「面もちの、常にもあらざるは、心ちや、なやましき。すこしも、早う、ねよかし」とて、盃を賜りつるに、今更のやうに、胸ふたがりて、涙の落つること、とゞめがたければ、御答も申さで、居たりしが、やうやうに、のどめて、何くれのをかしき物語など、きこえつるに、夕暮近うなりて、いたく、醉ひ給ひけむ、夕食めしながら、ころぶしつつ、熟睡ま給ひぬ。いと、弱うなり給へりと、見奉るにつけては、いはむかたもなく、苦しければ、蚊帳といふもの、ひきめぐらして、抱き入れまゐらせ、そこら、とり拂ひなどするに、月の光、涼しげに、澄み渡りて、東の妻戸より、さし入るにぞ、すこしは、心も、のどまるやうにてなむ。（萩原廣道）

八、丹波少將

治承三年正月下旬に、丹波の少將成經、平康頼入道、二人の人々は、肥前の國鹿瀬の莊を立ちて、都へとは、いそがれけれども、餘寒も、未だ、はげしく、海上も、いたく、荒れければ、浦づたひ、島づたひして、二月十日頃にぞ、備前の兒島に着き給ふ。

それより、少將は、父大納言殿のわたりあるなる、有木の別所とかやに、尋ね入りて見給へば、竹の柱、ふりたる障子などに書き置き給ひつる、筆のすさびを見給ひて、「あはれ、人のかたみには、手跡に過ぎたる物ぞなき。書き置き給はずば、いかで、これを見るべき」とて、康頼入道と二人、讀みては泣き、泣き

ては讀む。「安元三年七月二十日出家、同じき二十六日、信俊下向」とも、書かれたり。さてこそ、源左衛門尉信俊が參りたるをも知られけれ。傍なる壁には、「三尊來迎あり。九品往生疑なし」とも、書かれたり。このかたみを見給ひてこそ、さすが、欣求淨土の望もれはしけりと、限なきなげきの中にも、いさゝか、たのもしげには、のたまひけれ。

その墓を尋ねて見給へば、松の一むらある中に、かひがひしく、壇を築きたることもなく、土の、少し、高き所に向ひ、少將、袖かき合せ、生きたる人に、ものを申すやうに、泣く泣く、かきくどきて、申されけるは、「遠き御守とならせれはしましたることをば、島にても、かすかに、傳へ承つて候ひしかども、心にまかせぬうき身なれば、いそぎ參ることも候はず。成經、かの島に流されて後の便なさ、一日片時の命もありがたくこそ候ひしかども、さすが、露の命は消えやらで、この二年を送りて、今召しかへさるゝうれしさも、さる事にては候へども、父大納言の、まさしく、この世に、渡らせ給はむを、見參らせて候はゞこそ、さすが、命の長きかひも候はめ。これまでは、いそがれつれども、けふより後は、いそぐべしとも覺えず」とて、かきくどきてぞ、泣かれける。まことに、存生の時ならば、大納言入道殿こそ、いかにとも、のたまふべきに、生を隔てたるならひほど、恨めしかりけることはなし。苔の下には、誰か答ふべき。たゞ、嵐に騒ぐ松の響ばかりなり。

過去聖靈此音ヲスキサリテ佛如モキリシフヨヲフミ邦
惡ヒ人ノ魂ヲミラフ

その夜は、康頼入道と二人、墓のまはりを行道し、明くれば、新しく、壇築き、釘ぬきせさせ、前に假家造り、七日七夜が間、念佛申し、經書きて、結願には、大なる卒都婆を立て、「過去聖靈出離生死、證大菩提」と、書きて、年號月日の下には、「孝子成經」と、書かれければ、賤山がつの心なきも、「子に過ぎたる寶なし」とて、袖をぬらさぬはなかりけり。年去り年來れども、忘れ難きは、撫育のむかしの恩、夢の如く、幻の如し。盡きがたきは、戀慕の今の涙なり。三世十方の佛陀の聖衆も、憐み給ひ、亡魂尊靈も、いかにうれしとおぼしけむ。今しばらく候ひて、念佛の香をも摘むべく候へども、都に待つ人どもの、心もとなく候ふらむ。またこそ參り候はめ」とて、亡者に、暇申しつゝ、泣く泣く、そこをぞ立たれける。草のかげにても、なごりをしくや、れもはれけむ。

同じき三月十六日、少將、鳥羽へ、あけてぞ、着き給ふ。故大納言殿の山莊、すあま殿とて、鳥羽にあり。それに立ち寄り見給へば、住みあらして、年經にければ、築地はあれども、れひもなく、門はあれども、扉もなし。庭にたち入り見給へば、人跡絶えて、苔深し。池のほとりを見まはせば、秋の山の春風に、白波、頻に、れりかけて、紫鴛白鷗、逍遙す。興ぜし人のこひしさに、たゞ、つきせぬものは涙なり。家はあれども、欄門破れて、蔀、遣戸も、絶えてなし。「こゝには、大納言の、とこそれはせしか。この妻戸をば、かくこそ出で入り給ひしか。あの木をば、みづからこそ

植ゑ給ひしか」など、いひて、ことのはにつけても、たゞ、父の事をのみ、こひしげにこそ、のたまひけれ。

三月、中の六日なれば、花は、未だ、なごりあり。楊梅桃李の梢こそ、折知り顔にいろいろなれ。昔の主人はなけれども、春を忘れぬ花なれや。少將、花のもとにたち寄りて、

桃李不言春幾暮、烟霞無跡昔誰栖。（そこ）和漢朗詠集ニアリ

故里の、花のものいふ、世なりせば、此歌後拾遺集ニアリ多四ノ年

いかにむかしの、ことを問はまし。

この古き詩歌を口ずさみ給へば、康頼入道も、折ふし、あはれに覺えて、墨染の袖をぞぬらしける。くるゝほどは、待たれけれども、あまりに、なごりをしくて、夜更くるまでこそはしけれ。更け行くまゝには、荒れにたる宿のならひとて、古き軒の板間より、洩る月影ぞくまもなき。鷄籠の山、明けなむとすれども、家路は、更に、いそがれず。さてしもあるべきことならねば、迎に乗物どもつかはして待つらむも、心なしとて、少將、泣く、泣く、すあま殿を出でつゝ、都へ歸り上られけり。人々の心の中、さこそうれしくも、また、あはれにもありけめ。（ヨアケガタノ意）

康頼入道が迎にも、乗物はありけれども、今更、なごりのをしきにとて、それには乗らず、少將の車の尻に乗りて、七條河原までは行き、それより、行き別れけるが、なほ、行きやらざりけり。花の下の半日の客、月の前の一夜の友、旅人が、一村雨の過ぎゆくに、一樹の陰にたち寄りて、別るゝなごりも、をしき

ぞかし。況や、これは、うかりし島のすまひ、船の中、波の上、一向所感の身なれば、先世の芳緣も淺からずや思はれけむ。

少將の母、上靈山にれはしけるが、きのふより、宰相の宿所にれはして、待たれけり。少將のたち入り給ふ姿を、たゞ、一目見給ひて、「命あれば」と、ばかりにて、引きかづきてぞ、伏し給ふ。北の方は、さかしくも、美しく花やかに、れはせしかども、つきせぬ思に、やせ黑みて、その人とも見え給はず。六條が黑かりし髮も、白くなりたり。少將流されし時、三歲にて別れ給ひし稚き人も、今は、れとなしくなりて、髮結ぶほどなり。その傍に、三つばかりなる稚き人のれはしけるを、少將「あれは、いかに」と、のたまへば、六條「これこそ」と、ばかり申して、涙を流しけるにこそ。さては、わが流されし時、心苦しげなるありさまどもを見置きしが、こと故なく、育てけるよと、思ひ出でても、悲しかりけり。

少將は、もとの如く、院へ參らせ給ひて、宰相の中將まで上り給ふ。康賴入道は、東山雙林寺に、わが山莊のありければ、それに落ちつきて、まづ、かくぞつゞけける。

ふるさとの、軒の板間に、苔むして、
　れもひしほどは、洩らぬ月かな。

やがて、そこに籠居して、うかりし昔を思ひやり、寶物集といふ物語を書きけるとぞ、聞えし。（平家物語）

九、自然のあはれ二篇

一、月と露

よろづの事は、月見るにこそ、慰むものなれ。ある人の、「月ばかり、れも志ろきものはあらじ」と、いひしに、又、ひとり、「露こそ、あはれなれ」と、爭ひしこそ、をかしけれ。折にふれば、何かは、あはれならざらむ。月花は、更なり、風のみこそ、人に、心はつくめれ。岩に碎けて、清く、流るゝ水のけしきこそ、時をもわかず、めでたけれ。「沅湘日夜東に流れ去る、愁人のためにとゞまる事志ばらくもせず」と、いへる詩を見しこそ、あはれなりしか。稽康も、山澤に遊びて、魚鳥を見れば、心たゞしぶといへり。人遠く、水草清き所にさまよひありきたるばかり、心慰む事はあらじ。（徒然草）

二、花と月

花は、さかりに、月は、くまなきをのみ、見るものかは。雨にむかひて、月を戀ひ、たれこめて、春のゆくへ知らぬも、なほ、あはれに、なさけ深し。咲きぬべきほどの梢、散り萎れたる庭などこそ、見所ほけれ。歌の詞書にも、「花見にまかりけるに、はやく、散り過ぎにければ」とも、「障る事ありて、まからで」なども、書けるは、「花を見て」と、いへるに劣れる事かは。花の散り、月の傾くを慕ふならひは、さる事なれど、ことに、かたくなゝる人ぞ、「この枝、かの枝、散りにけり。今は、見所なし」などは、いふめる。よろづの事は、始終こそをかしけれ。望月のくまなきを、千里の

外まで眺めたるよりも、曉近くなりて待ち出でたるが、いと、心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる、木の間の影、うちしぐれたる、むら雲がくれのほど、又なく、あはれなり。椎柴、白樫などの、ぬれたるやうなる葉の上に、きらめきたるこそ、身にしみて、心あらむ友もがなと、都こひしう、覺ゆれ。すべて、月花をば、さのみ、目にて見るものかは。春は、家を立ち去らでも、月の夜は、閨の内ながらも思へるこそ、いとたのもしう、をかしけれ。（徒然草）

一〇、法性寺忠通

法性寺のれとゞは、富家の入道れとゞの御子にれはしま

す。四代のみかどの關白にて、ふたゝび、攝政と申しき。昔も、いと、たぐひなきことにこそ侍りけめ。れほきれとゞにも、ふたたびなり給へりし、いと、ありがたく侍りき。藤氏の長者さまたげられ給ひしも、左のれとゞの、事にあひ給ひしかば、保元元年七月に、更に、かへりならせ給ひにき。同じ三年八月十六日、二條のみかど、位につかせたまひし時、今の殿の御兄にれはしましゝ、右のれほいまうちぎみに、關白讓りきこえさせ給ひて、大殿とて、れはしましゝに、應保二年に、御ぐしれろさせ給ひてき。御年六十六とぞ、うけたまはりし。長寛二年二月十九日、六十八ときこえさせ給ひし年、かくれさせ給ひき。

昔、まだ、幼くれはしましゝ時、春日の祭の使せさせ給ひし

に、内侍周防の御、參りて、行事辨爲隆に申しれくりける。

いかばかり、神も嬉しと、みかさ山、

ふたばの松の、千代のけしきを、

そのかへしは、劣りたりけるにや、きこえはべらざりき。祈り奉りたるまゝるしありて、めでたく久しくせさせ給ひ、法性寺の御堂の御所など作りて、貞信公の御堂のかたはらに、住ませたまひしかば、法性寺殿とぞ申すめる。昔より、攝政關白つづきてれはしませど、身の御才は、たぐひなくれはしましき。才學も、すぐれて、れはしましける上に、詩など作らせ給ふことは、いにしへの宮、帥殿などにも劣らせ給はずやれはしけむ。歌よませ給ふことも、心たかく、昔の跡をねがひ給ひたるさまなりけり。管絃の方、心にまめさせ給ひて、箏のことを、むねと、御あそびなどにも、ひかせ給ふとぞ、聞き侍りし。

手かゝせ給ふことは、昔の上手にも恥ぢず、れはしましけり。眞名も、假名も、このもしく、今めかしき方さへそひて、すぐれて、れはしましき。内裏の額ども、ふるきをばうつし、失せたるをば、更に、かゝせ給ふとぞ、うけたまはりし。院、宮の御堂、御所などの色紙形は、いかばかりかは、れほくかゝせ給ひし。御願よりはじめて、寺々の額など、數まらず、かゝせ給ひき。横河の花臺院などは、古き所の額も、むかへ講、すゝめけるひじりの申したるとて、かゝせ給へりとぞ、山の僧は申しゝ。

また、幼くれはしましゝ時より、歌合など、朝夕の御あそび

にて、基俊、俊頼などいふ、時の歌よみどもに、人の名かくして、判ぜさせなど、せさせ給ふ事、絶えざりけり。御歌など、れほく聞き侍りし中に、

海の原、こぎいでて見れば、久方の、
雲井にまがふ、れきつ志らなみ。

など、よませ給へる御歌は、人麿が「島がくれゆく、舟をしぞれもふ」など、よめるにも、恥ぢずやあらむとぞ、人は、申し侍りし。

よし野山、みねの櫻や、さきぬらむ。
ふもとの里に、にほふはるかぜ。

など、よませ給へるも、心も、詞も、たへにして、金玉集などに、選びのせられたる歌の、つらになむ、きこえ侍るなる。からの文作らせ給ふ事も、かくぞありける。されば、ふみの心ばへ志らせ給ふ事、深くなむ、れはしける。白河院にも、三卷の詩、選びて奉り給ひ、基俊の君にも、からやまとのをかしき言の葉どもをぞ、選びつかはさせたまひける。また、作らせ給へるからの詞ども、御集とて、唐の白氏の文集などの如くに、事好む人、もてあそぶとぞ、うけたまはる。（今鏡）

一一、むろの八島

法性寺入道前太政大臣、内大臣にはべりける時、十首の歌よませはべりけるに、よめる、

源　俊頼朝臣

けぶりかと、室の八島を、見しほどに、
やがても空の、かすみぬるかな。　左近中將良經

花の歌とて、よみ侍りける、

さくらさく、比良の山風、ふくまゝに、
花になりゆく、志賀のうらなみ。　皇太后大夫俊成

秋の歌とて、よめる、

夕されば（タニナレバ）、野邊のあき風、身にしみて、
うづらなくなり。ふかくさの里。　源俊頼朝臣

擣衣（キヌタ）

松かぜの、れとだに秋は、さびしきに、
ころもうつなり。たまがはの里。

落葉の歌とて、よめる、　皇太后大夫俊成

まばらなる、槇の板屋に、れとはして、
もらぬ時雨や、木の葉なるらむ。

關路曉月といふこゝろを、　法眼兼覺

いつもかく、有明のつきの、あけがたは、
ものやかなしき。須磨の關もり。

心のほかなることありて、知らぬ國に侍りける時、
よめる、　平康頼

さつまがた、沖の小島に、われありと、
れやには告げよ。八重のしほ風。

月の歌十首、よみ侍りける時、　藤原家基

さ夜千鳥、ふけひの浦に、れとづれて、
ゐぞまがいそに、月かたぶきぬ。

（千載和歌集）

一二、鉢の木その一

急ぎ候ふほどに、上野國、佐野のわたりに着きて候ふ。あらしょうし笑止や、また、雪の降り來りて候ふ。いかに、この家のうちへ、案内申し候ふ。「誰にてわたり候ふぞ。」「これは、修行者にて候ふ。一夜の宿を御貸し候へ。」「やすき御事にて候へども、主人の御留守にて候ふほどに、御宿は、かなひ候ふまじ。」「さらば、御歸宅まで、これに待ち申さうずるにて候ふ。」「それは、ともかくもにて候ふ。われらは、外面へいで迎へ、この由を申さばやと、思ひ候ふ。（中略）

「あら、れもひもよらずや、このたほ雪に、なにとて、こゝにたたずみて、御入り候ふぞ。」「さん候ふ。修行者の御入り候ふが、一夜の御宿と仰せ候ふほどに、御留守のよし、申して候へば、御歸まで、御待ちあらうずる由、仰せ候ふほどに、これまで、まゐりて候ふ。」「さては、修行者は、いづくに、御入り候ふぞ。」「あれに、御入り候ふ。」「われらが事にて候ふ。まだ、日は、高く候へども、あまりの大雪にて、前後を忘じて候ふほどに、一夜の宿を、御貸し候へ。」「やすきほどのことにて候へども、あまりに、見苦しきほどに、御宿は、かなひ候ふまじ。」「いやいや、見苦しきは、くるしからぬことにて候ふ。平に、一夜の宿を、御貸し候へ。」「とめ申した

くは候へども、われら夫婦さへ、住みかねたる體にて候ふほどに、なかなか、御宿は、思ひもよらぬことにて候ふ。これより、八町ばかりあなたに、山本の里とて、よき泊の候ふ。日もくれぬ前に、一足も、はやく、御出で候へ。「さては、ふかと、御貸しあるまじいにて候ふか。「御いたはしくは、存じ候へども、御宿は、まゐらせがたう候ふ。「あら、曲もなや、よしなき人を待ち申して、候ふものかな。

「淺ましや、われら、かやうに、衰ふるも、前世の戒行拙き故なり。せめては、かやうの人に、値遇申してこそ、後の世の便ともなるべけれ。然るべくば、御宿をまゐらせたまひ候へ。「左樣に、思し召し候はゞ、何とて、以前には、承り候はぬぞ。いやいや、こ

の大雪に、遠くは、御出で候ふまじ。某、れひつき、とめ申さうずるにて候ふ。

「ならうなら、旅人、御宿まゐらせうなう。あまりの大雪に、まをすことも聞えぬげに候ふ。御いたはしの御有樣やな。もと降る雪に道を忘れ、今降る雪に行方を失ひ、一所にたゝずみて、袖なる雪をうち拂ひ、うち拂ひふたまふけしき、古歌の心に似たるぞや。「駒とめて、袖うち拂ふ、陰もなし。佐野のわたりの、雪の夕ぐれ。「かやうに、よみしは、大和路や、これは、東路の、佐野のわたりの雪の暮に、迷ひつかれたまはむより、見苦しく候へども、一夜は、泊りたまへやげに、これも、旅の宿、かりそめながら、値遇の縁、一樹の陰の宿も、この世ならぬ契なりけり。そ

れは、雨の木陰、これは、雪の軒ふりて、うきねながらの草枕、夢より霜や結ぶらむ。

一三、鉢の木その二

「いかに申し候ふ。御宿は申して候へども、なにゝても候へ、まゐらせうずるものなく候ふは、いかに。」折節、これに、粟の飯の候ふほどに、苦しからずば、まゐらせ候へ。」「さらば、そのよし申し候ふべし。」「いかに申し候ふ。御宿をば、まゐらせて候へども、なにゝてもあれ、まゐらせうずる物もなく候ふは、いかに。をりふし、これに、粟の飯の候ふ。苦しからずば、きこしめされ候へ。」「それこそ、日本一のことにて候ふ。たまはり候へ。」「なう、きこしめされうずると、仰せ候ふ。いそぎて、まゐらせ候へ。」「心得申し候ふ。」「惣じて、この粟と申すものは、古、世にありし時は、歌によみ、詩に作りたるこそ、承り候へ。今は、この粟をもて、身命をつぎ候ふ。げにや、廬生が見し榮華の夢は、五十年、その邯鄲の假枕、一炊の夢の覺めしも、粟飯を炊ぐほどぞかし。あはれや、げに、われも、また、志ばしなりとも、うちも寢て、夢にも、昔を見るならば、慰む事もあるべきに、なう、御覽ぜよ、かほどまで、住みうかれたる故郷の、松風寒き夜もすがら、寢られねば、夢も見ず。なに思ひでのあるべき。

「夜のふくるにつき、次第に、寒くなり候ふ。何をがな、焚火にて、まゐらせ候ふべきや。思ひいだしたることの候

邯鄲夢　唐世呂翁邯鄲町ニ遊ビ休ンデアリシニ書生盧生来リ貧キヲ語リ翁ニ枕ヲカセヲ枕セヨ汝ノ思フ様ニ成ベシト即寢テ夢ミシニ佳人ヲ妻トシ身ハ顯榮ヲ遂ケ成リ終ニ覺ムル前ニ寢ル時其家ニ炊キテアリシ飯ハ未ダ熟ニ未ザリキ人生五十年ヲ醉ノ如シト高サリ

ふ。鉢の木を持ちて候ふ。これを切り、火に焚いて、あて申し候ふべし。「げにげに、鉢の木の候ふよ。」さん候ふ。某、世にありし時は、鉢の木を、數多（あまた）、持ちて候ひしを、かやうの體にまかりなり、いやいや、木數寄も、無用と存じ、皆、人にまゐらせ候ふ。さりながら、今も、梅、松、櫻を持ちて候ふ。あの雪もちたる木にて候ふ。某の秘藏に候へども、今夜の御もてなしに、これを焚き、あて申さうずるにて候ふ。「いやいや、これは、れもひもよらぬ事にて候ふ。御志は、ありがたう候へども、自然、御こと、世に出で給はむ時の御慰にて候ふ間、なかなか、れもひもよらぬ事にて候ふ。「いや、とても、この身は埋木の、花咲く世にも逢はむこと、今、この身にては、あひがたし。たゞ、徒なる鉢の木を、御身のために焚くならば、これぞ、まことに、難行の、法の薪とれぼしめせ。（中略）

「近頃、よき火にあたりて候ふ。いかに、申し候ふ。主の御名字をば、何と申し候ふぞ。承りたく候ふ。」いや、某は、名字もなきものにて候ふ。」何と仰せ候ふ。何の苦しう候ふべき。御名乘り候へ。」この上は、何をかつゝみ候ふべき。これこそ、佐野源左衞門常世がなれるはてにて候へ。」それは、何とて、かやうの散々の體には、御成り候ふぞ。」そのことに候ふ。一族どもに、押領せられ、かやうの身となりて候ふ。」なう、それは、なにとて、鎌倉へ御のぼり候うて、御沙汰には、いだされ候はぬぞ。

「運のつくる所は、最明寺殿さへ、御修行に御出のうへはと

思ひ候ふ。かやうに、れちぶれて候へども、御覽候へ。これに、武具一領、長刀一枝、また、あれに、馬を一匹つないで持ちて候ふ。これは、たゞいまにもあれ、鎌倉に、御大事あらば、ちぎれたりとも、この具足、とつて投げかけ、錆びたりとも、長刀を持ち、痩せたりとも、あの馬に乘り、一番に、馳せ參じ、着到につき、さて、合戰はじまらば、敵、大勢なりとても、一番に、破つて入り、れもふ敵と寄り合ひ、打ち合ひて、死なむこの身の、このまゝならば、徒に飢につかれて、死なむ命、なんぼう、無念のこと候ふぞ。「よしや、身の、かくてははてじ。たゞたのめ。われ、世の中にあらむほど、またこそまゐり候はめ。名殘惜しの御事や、はじめは、つゝむわが宿の、さも、見ぐるしく候へど、志ばしは、とまりたまへや。」とまる名殘のまゝならば、さて、幾度か雪の日の、「空さへ寒き、この暮に、いづこに、宿をかり衣、「今日ばかりとまりたまへや。」名殘は、宿にとまれども、暇申して、「御いでか。」「さらばよ、常世。」また、御入り、「自然、鎌倉へ御のぼりあらば、御尋あれ。希有がる法師なり。かひがひしくはなけれども、公方の緣になり申さむ。」「御沙汰捨てさせたまふな」と、いひすてゝ、出舟の、ともに、名殘やをしむらむ。（謠曲集）

一四、　鎭西八郎爲朝　その一

新院は、齋院の御所より、北殿へ遷らせ給ふ。左府は、車にて參り給ふ。白河殿より北、河原より東、春日の末にありければ、

北殿とぞ申しける。南の大炊御門表に、東西に、門二つあり。東の門をば、平馬助忠正、承つて、父子五人、並に、多田藏人大夫頼憲、都合二百餘騎にて、固めたり。西の門をば、六條判官爲義、承つて、父子六人して、固めたり。その勢、百騎ばかりには過きざりけり。これこそ猛勢なるべきが、嫡子義朝に附いて、多分は、内裏へ參りけり。こゝに、鎭西八郎爲朝は、「われは、親にも連るまじ。兄にも具すまじ。功名不覺も紛れぬ樣に、只一人、いかにも、强からむ方へ差し向け給へ。たとひ、千騎もあれ、萬騎もあれ、一方は、射拂はんずるなり」とぞ、申しける。依つて、西河原表の門をば、固めけり。北の春日表の門をば、左衞門大夫家弘、承つて、子供具して、固めたり。その勢、百五十騎とぞ聞えし。

抑も、爲朝一人として、殊更、大事の門を固めたること、武勇、天下に許されし故なり。件の男、器量、人に越え、心、飽くまで、剛にして、大力の强弓、矢つぎ早の手利なり。弓手の肘、馬手に四寸延びて、矢束を引くこと、世に越えたり。幼少より、不敵にして、兄にも、所を置かず、傍若無人なりしかば、身に添へて、都に置きなば、悪しかりなむとて、父、不興して、十三の歳より、鎭西の方へ追ひ下すに、豐後の國に居住し、尾張權守家遠をめのとゝし、肥後の國の阿曾平四郎忠景が子、三郎忠國が婿になつて、君よりも賜らぬ、九國の總追捕使と號して、筑紫を隨へむとおもければ、菊池、原田をはじめとして、所々に、城を構へて、立て籠れば、その儀ならば、いで、落して見せむとて、いまだ、勢

も附かざるに、忠國ばかりを、案内者として、十三の歳の三月の末より、十五の歳の十月まで、大事の軍をすること、二十餘度、城を落すこと、數十箇所なり。城を攻むる謀、敵を伐つ術、人に勝れて、三年が内に、九國を、皆、攻め落して、みづから、總追捕使に押しなつて、惡行れほかりけるにや、香椎宮の神人等、都に上り訴へ申す間、いにし久壽元年十一月二十六日、德大寺中納言公能卿を、上卿として、外記に仰せて、宣旨を下さる。

源爲朝、久住宰府、忽諸朝憲、咸背綸言、梟惡頻聞、狼藉尤甚、早可令禁進其身、依宣旨執達如件。

然れども、爲朝、猶、參洛せざりければ、れなじき二年四月三日、父爲義を解官せられて、前檢非違使になされたり。爲朝、これを聞きて、「親の科に當り給ふらむこそあさましけれ。その儀ならば、われこそ、いかなる罪科にも、行はれんずれ」とて、急ぎ上りければ、國人共も、上洛すべきよし、申しけれども、大勢にて、罷り上らむこと、上聞穩便ならずとて、形の如くに、つき從ふ兵ばかり、召し具しけり。傅子の箭前拂の須藤九郎家季、その兄隊間數の惡七別當、手取の與次、同じき與三郎、三町礫の紀平次大夫、大矢の新三郎、越矢の源太、松浦二郎、左中次吉田兵衞、打手の紀八、高間三郎、同じく四郎をはじめとして、二十八騎をぞ具したりける。依つて、去年より在京したりしを、父、不興をゆるして、今度の御大事に召し具しけるなり。

一五、鎮西八郎爲朝その二

爲朝は、七尺ばかりなる男の、目角二つ切れたるが、紺地に、色々の絲を以て、獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以て威したる、大荒目の鎧、れなじき獅子の金物打つたるを着るまゝに、三尺五寸の太刀に、熊の皮の尻鞘入れ、五人張の弓、長さ、七尺五寸にて、鈌打つたるに、三十六差したる黒羽の矢負ひ、兜をば、郎等に持たせて、歩み出でたる體、樊噲もかくやと覺えて、ゆゝしかりき。謀は、張良にも劣らざれば、堅き陣を破ること、吳子、孫子が難しとするところを得、弓は、養由にも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふことなし。上皇をはじめまゐらせて、あらゆる

人々、音にきこゆる爲朝見むとて、擧り給ふ。左府、すなはち、「合戰の趣、はからひ申せ」と、宣ひければ、畏つて、「爲朝、久しく、鎮西に居住仕つて、九國の者ども從へ候ふについて、大小の合戰、數を知らず。中にも、折角の合戰、二十餘箇度なり。或は、敵に圍まれて、强陣を破り、或は、城を攻めて、敵を亡すにも、皆、夜討にあらくこと侍らず。然れば、只今、高松殿に押し寄せ、三方に、火を懸け、一方にて、支へ候はむに、火を遁れむものは、矢を免るべからず。矢を恐れむ者は、火を遁るべからず。主上の御方、心にくゝも候はず。但し、兄にて候ふ義朝などこそ、駈け出でんずらめ。それも、眞中指して射通し候ひなむ。まして、清盛などが、へろへろ矢、何程の事か候ふべき。鎧の袖にて拂ひ、蹴ちらし

て捨てなむ。行幸、他所へ成らば、御ゆるされを蒙つて、御供の者、少々射んずる程ならば、定めて、駕輿丁も、御輿を捨てゝ、逃げ去り、候はんずらむ。その時、爲朝參り向ひ、行幸を、この御所へ成し奉り、君を、御位に即けまゐらせむこと、掌を反す如くに候ふべし。主上を迎へまゐらせむこと、爲朝、矢二つ三つ放さんずるばかりにて、未だ、天の明けざらむ前に、勝負を決せむ條、何の疑か候ふべき」と、憚る所もなく、申したりければ、左府「爲朝が申すやう、以ての外の荒儀なり。歳の若きが致す所か。夜討などいふこと、汝等が同士軍、十騎二十騎の私事なり。さすが、主上、上皇の御國あらそひに、源平、數をつくして、兩方に在つて、勝負を決せむに、無下に、然るべからず。その上、南都の衆徒を召さるゝことあり。興福寺の信實、玄實等、芳野、十津河の、指矢三町、遠矢八町といふ者どもを、召し具して、千餘騎にて參るが、今夜は、宇治に着き、富家殿の見參に入り、曉、これへ參るべし。彼等を待ち調へて、合戰をば致すべし。又、明日、院司の公卿、殿上人を催さむに、參らざる者共をば、死罪に行ふべし。首を刎ぬること、兩三人に及ばゝ、殘は、などか參らざるべき」と、仰せられければ、爲朝、上には、承伏申して、御前を罷り立ちて、つぶやきけるは、「和漢の先蹤、朝廷の禮節には、似も似ぬ事なれば、合戰の道をば、武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御はからひ、如何あらむ。義朝は、武畧の奥義を究めたる者なれば、定めて、今夜、寄せむとぞ仕り候ふらむ。明日ま

でも延べばこそ、芳野法師も、奈良大衆も、入るべけれ。たゞ今、押し寄せて、風上に、火を懸けたらむには、戰ふとも、いかでか利あらむ。敵、勝に乘る程ならば、たれか一人、安穩なるべき。口惜しきことかな」とぞ申しける。（保元物語）

一六、戰爭と文學

一國の文學は、他の藝術とひとしく、その國民の思想、および、感情を代表するもの、すなはち、國民の靜勢的活動の代表なり。さかして、戰爭は、たなじ國民の動勢的活動なり。さて、この象（かたち）をことにして、根を一にせる二者の關係は、說明しやすきが如くにして、說明しやすからず。簡單なるが如くにして、

複雜なり。

文學と戰爭との關係は、二樣なり。文學の、主となれる場合と、文學の、客となれる場合となり。文學が、戰亂の因緣となれる場合と、文學が、戰亂の果報となれる場合となり。もとより、文學も、戰亂も、ともに、當代の思想、感情の反映、すなはち、殊相同源の發動なれば、互に、動機を一にし、相因果すべきものなれども、なほ、こまかに、わかつ時は、主客因果の差別あり。たとへば、佛國革命にさきだちて、ルソー、ボルテール等が唱道せし、社會革新的學說のごとき、たとひ、因たるに足らざりしも、その一緣たりしや、明なり。また、わが國にていへば、かの水戸藩等の各勤王家の述作の如き、いづれも、明治革新の間接緣

となりしなり。これらは、文學を主としたる場合なり。たゞし、嚴正にいへば、かくの如きは、畢竟、天下の大勢の、然らしめしところ、文學は、わづかに、大勢爆發の一導火たりしに外ならざるなり。一二文學の力、よく、天下の大勢を動し得べしと思ふは、まことに、白日夢の譫語なり。

戰爭の文學にれよぼす影響は、前者に比すれば、利害、やゝ、複雜なり。それ、戰爭は、つねに、現代にのみ關するものにして、文學の本質は、すくなくとも、數百千年にわたるべきものなり。もし、その緣起、影響の上よりいへば、いかなる戰爭も、前後數代に關係すれど、その實際の作用上よりいへば、專ら、當代にのみ關係するものなり。そは、全國の人心をして、奮發激昂せしむるなど、その當代の得喪に聯關するところ、甚だ、深ければ、なり。しかるに、文學の活動する範圍は、かくの如くならず。現世間に關係すると共に、未來幾千年後の世間にも關係すべき特質を具ふ。これ、文學の價値の普遍平等なる所以なり。しかれども、所謂、普遍平等の義が、超世、もしくは、出世間の謂にあらずして、現世兼未來の謂なる以上は、いかなる文學も、所詮は、現世に聯關せざるを得ず。くはしくいへば、間接もしくは、直接に、當代の大事件によりて、動さるゝことなき能はず。ましてや、國家的鬪爭の如き大現象は、必ず、若干の大影響を、文學の主題、および、性質の上にれよぼすべき理なり。しからば、その影響は、善か。惡か。

この影響も、また、直接と間接との二あり。さて、いかなる場合にありても、その直接の影響は、文學のためには、悅ぶべきものにあらず。なにとなれば、國家的大鬪爭の激昂は、國の諸制度をあげて、多少、實際的、私用的、物質的とならしむる傾あるが故に、文學美術の如きも、幾分か、れなじ臭味に薫染せられ、とかくに、現在的、應世的となるれそれあればなり。戰爭の當時は、概して、詩靈かくれ、天馬蟄する時なり。戰爭は、國民をして、その全生命をも、犧牲に供せしむ。況や、その他をや。國民の當の敵は、人道の大敵、信仰の賊、一切本願の仇なり。まづ、彼を倒さずば、一切の企望、遂に、遂ぐる期あるべからず。こゝにれいてや、擧國の心、ひとへに、戰爭に向ひて、他を顧るに遑な

し。たゞに、文學美術のみならむや、教育、農商等、片時も缺くべからざるものすら、或は、時に、等閑視せらるゝことあり。

そもそも、文學は、もと、一種の遊戯、戰爭は、最も、嚴格なる實際事業、この極慘なる實際的活動は、人心をして、最も、現在に傾かしむるもの、最も、利己的、すなはち、差別的ならしむるものの、かの優美なる遊戯三昧は、人心をして、一種の別天地に逍遙せしめむと期するもの、最も、無私的、すなはち、平等的たらしめむと期するもの、その枘鑿、相容れざる性、一朝、混ぜられて、一となる、文、もし、武に勝たば、文弱、武、もし、文に勝たば、殺伐、よし、志からざるも、文學をあげて、現世的たらしめむは、必然なり。志かり、普遍平等なるべき文學をして、特殊差別の文學

たらしめ、三世相通の奥妙を没して、世間一時の好尚に供す、これ、文學を裨益する所以にあらざるなり。就中、文學の、最も、高尚なるもの、すなはち、純乎たる客觀の詩、劇詩、小説のたぐひは、ときばらくは、これがために、影をかくさむ。ひとり、主觀の詩、すなはち、抒情、述懷の作は、或は、實感に動されたる、多感の詩人が、不思議靈妙なる繡腸よりなりいでて、至誠、鬼神をして哭せしむることあらむ。されど、こは、偶然の結果、れそらくは、戰爭の必然的なる直接影響にはあらざるべし。

國民、既に、その想像を、差別の時と處とに限り、平等の夢幻界に遊ばするを得ず。こゝにれいてや、最も、歡迎せらるべき文學は、現世的實錄、もしくは、現世的事件に縁故ある記錄、これなり。すなはち、文學の形式上よりいへば、所謂、寫實的なるもの、最も、喜ばれ、質の上よりいへば、勇壯悲哀、もしくは、殺伐なるもの、また、精神の上よりいへば、總じて、主觀的、抒情的、就中、愛國の思想感情を吐露せるもの、最も、悦ばれむ。ときかして、その國の、過去の光榮の記錄、もしくは、過去の英雄、豪傑、忠臣、孝子、節婦、烈女等の傳説の如きは、同一精神に協ふべきものなれば、これら、史に關する抒情歌、叙事詩、小説等、一層の繁昌をなすことあるべし。これ、余の揣摩の説にあらず、列國の文學史、皆、これを證して、あまりあらむ。（坪内雄藏著文學その折々）

一七、飢饉

養和の頃かとよ、久しくなりて、たしかに、覺えず。二年が間、飢渴して、淺ましき事ありき。あるは、春夏、ひでり、あるは、秋冬、大風、大水など、よからぬ事ども、うちつゞきて、五穀、ことごとく、みのらず。空しく、春耕し、夏植うるいとなみのみありて、秋刈り、冬、收むるぞめきはなし。これによりて、國々の民、あるは、地をすてゝ、境を出で、あるは、家を忘れて、山に住む。さまざまの御祈、はじまりて、なべてならぬ法ども、行はるれども、さらに、そのしるしなし。京のならひ、なにわざにつけても、みなものとは、田舍をこそたのめるに、絶えて、のぼるものなければ、さのみやは、みさをも作りあへむ。念じわびつゝ、物、かたはしより、すつるが如くすれども、更に、目みたつる人もなし。たまたま、換ふるものは、金を輕くし、粟を重くす。乞食、道のへに多く、うれへ悲ぶ聲、耳にみてり。

先の年、かくのごとく、からくして、暮れぬ。明くる年は、たちなほるべきかと思ふに、あまさへ、えやみうちそひて、まさるやうに、跡かたなし。世の人、皆、うゑ死にけれは、日を經つゝ、きはまり行くさま、少水の魚のたとへに叶へり。はてには、笠うちき、足ひきつゝみ、よろしき姿したる者、ひたすら、家ごとに、乞ひありく。かく、わびしれたる者ども、ありくかと見れば、すなはち、たふれ死ぬ。ついひぢのつら、路頭にうゑ死ぬる類は、かず知らず。とりすつるわざもなければ、くさき香、世界にみちみちて、かはり行くかたちありさま、目もあてられぬ事多

かり。いはむや、河原などには、馬車の行きちがふ道だにもなし。あやしきまづ山がつも、力つきて、薪にさへともしくなりゆけば、たのむかたなき人は、みづから、家をこぼちて、市に出でて賣るに、一人が持ち出でぬるあたひ、猶、一日が命を、さゝふるにだに及ばずとぞ。あやしき事は、かゝる薪の中に、丹つき、白がね、こがねの箔など、所々につきて見ゆる木のわれあひ、まじれり。これを尋ぬれば、すべき方なきものゝ、古寺に到りて、佛を盗み、堂の物の具を破り取りて、割りくだけるなりけり。濁悪の世にしも、生れあひて、かゝる心うきわざをなむ見たりし。

又、いとあはれなる事もありき。さりがたき夫妻など、持ち

たる者は、その志、まさりて深きは、必ず、さきだちて死ぬ。その故は、わが身をは、次になして、夫にもあれ、妻にもあれ、いたはしく思ふかたに、たまたま、乞ひ得たる物を、まづ、ゆづるによりてなり。されば、父子ある者は、定れる事にて、親ぞ先だちて死にける。又、母が命盡きて、ふせるも知らずして、いとけなき子の、その乳房に吸ひつきつゝ、ふせるなども、ありけり。

仁和寺に、隆曉法印といふ人、かくまつゝ、數まらず、死ぬる事を悲みて、ひじりを、數多かたらひつゝ、その死首の見ゆるごとに、額に、阿の字を、書きて、緣を結ばしむるわざをなむせられける。その人數を知らむとて、四五兩月がほど、かぞへたづぬれば、京の中、一條より南、九條より北、京極より西、朱雀よ

り東、道のほとりにある頭、すべて、四萬餘なむありける。いはむや、その前後に死ぬるものも多く、河原、白河、西の京、もろもろの邊地などを加へていはゞ、際限もあるべからず。いかにいはむや、諸國七道をや。近くは、崇德院の御位の時、長承のころかとよ、かゝる例はありけりと聞けど、その世のありさまは知らず。まのあたり、いとめづらかに、かなしかりしことなり。（方丈記）

一八、人生の四季

語の創新なるをめづるは、人情の自然なれども、語は、新しきをのみ、取るべきにあらず。古くより、いひふるしたる語の、今、なほ、棄てがたき、まゝあり。かゝる語は、分外に、幽玄の旨を含めることあり。更に、敷衍せらるべきことあり。新しき解釋を容るゝことあり。語の創新ならざるを惡むは、自然の風物の、萬古一色なるを惡まむが如し。いかなる新釋を容れても餘あらむ語は、實に、不易の妙語なり。その不拔なるは、自然その物にも比すべし。まかして、かゝるたぐひは、ひとり、賢者詩人の語にのみいて、見るのみにあらず、俚歌、れよび、俗言のうちにも、まばまばあり。かの人生を、四季に配して、少壯を春季とし、老衰を晩秋、又は、冬季とするが如き、その一例なり。

この陳腐なる對比は、何人も思ひつくべき、平凡なる喩なれど、その新奇ならぬ所、やがて、その妥當なる所以なるが如

し。れもふに、人の一生を、物にたとへたるは、東西の詩文章に、いと、古くより、あまた、見えたれど、かばかり、妥當にして、旨味のふかきはあらじ。英劇詩歌一五七三、一六一八ジョンソンが、これを航海に比し、シェクスピアが、これを演劇にくらべたるなどは、人の知るところにて、かゝるたぐひの着想は、こなたにも見えたれど、これらは、むしろ、頓才の落想たるに近く、その寓意も、また、皮相ばかりにして、淺々し。四季に比べたるものこそ、いよいよ、玩味して、その旨、いよいよ、深しといふべけれ。

生き写し思想

ちらつく意味

蓋し、人生と四季と相似たるは、詩人の想像をまたずして、ましるけし。紅顔の、花に似たるを見、白髮の、雪に似たるを見むもの、誰か、春冬を聯想せざらむ。うら若きを、人生の朝と名づけ、老いくちたるを、人生の夕と呼べるにひとしく、翁をさして、幾十冬の霜をいたゞくといひ、少女の麗しきを稱して、二八の春の花といはむは、自然に、思ひよるべき喻なり。かゝるたぐひ、一々に擧げていはゞ、數かぎりもなけれど、これらは、皆、一かどほどの對比にて、普く、四季に配したるにはあらず。さるにても、この比喩は、かくばかり、妙にして、妥當なるに、想像のいみじき詩人の、などて、今一層、敷衍せざりしと、心得がたく思ひし年ごろ、いさゝか、心して、東西の詩文を讀みしに、英國の作家のうちには、四季に、人生を思ひよせたるもの、少からず。ましかるに、わが國人の歌人の作には、四季を歌ひたるは、限ましらぬほどにあれど、いづれも、たゞ、四季の風物光景を、

うちながめたるのみにて、深く、人生に思ひよせたるはなし。總じて、色形を本としたる對比にて、これの色形と、かれの色形とを比べたるが多し。客觀的、すなはち、視感上の對比なり。英國の詩人のも、大かたは、客觀的なれど、まゝ、主觀的といふべきもの、少からず。トムソン、ソウシーが作に見えたる觀念の如きは、まことに、玄妙なり。ソウシー、秋を詠じて、

人は、秋季の美しきを、ひたすらに、哀しきものに、思ひなして、年老い、精神衰へ、苦痛、身にあまりながら、なほ、死にやらぬ老人の、いと、淺ましげなるに思ひ寄すれど、我が眼には、未か、見えず。秋の、長閑にして、物靜なるは、たとへば、肉體は、衰へたれど、精神は、なほ、健なる人の、後世の信心堅固にして、老いて、いよゝ、心の花の開けたらむがごとし。人は、秋の景物を、黯澹落莫なるものとなし、この、うつくしの世の中に、あるれそろしき元機活動し、生物のすみかなる、氣、土、水の三界は、互に、相呑噬して、止む時なく、又、人間には、悪害と不幸と纏綿し、さながらに、八重襁のほぐしがたきやうに、絶えて、行末の頼まれぬ、いと、淺ましきものなりと思ふ。あはれ、世の人の信念も、わが思ひなせる如くならばや。あはれ、死は、常に生を産み、悪は、常に、みづから、亡びゆくことを知らせばや。あはれ、このれそろしきあらしのかなたに、麗しき天つ日の、ほのぼのと、さしのぼる影を見せばや。未からば、何物か喜の種ならぬ。世のうき事は、ことごとく、忘れ

らるべし。たれかは、常に、神明の大德の、いと、偉なるを認めざらむ。

と、歌へり。また、冬を詠じて、

春の長閑に和げる、夏の夕暮の風の涼しき、秋の風の錦なす森にわたる、いづれ、美しからぬはなけれど、寂寞にして、靜なる冬の景色の、さながら、造化の禪定したらむやうなるこそ、靜平なる心には、樂しけれ。

と、歌ひ、くさぐさの景物を、描ける後、

いでや、造化が、冬といふ墓穴のうちに、潛み隱れて、生ひ出づべき芽をもいださず、花ひとつだに咲かせぬほどぞ、つらつら考ふれば、樂しかりける。かく、志ばし、かくろへるは、

やがて、また來む春を待ちて、こよなく、麗しう裝はせ、生ひ出づべき、芽をもひらき、花をも咲かせむためと思へば。

と、歌へり。かうやうの想、かなたの作には、乏しからねど、和漢のには、いと、稀なり。

ことに、わが國の詩文人の四季に對する感想は、れしなべて、かたよりたり。彼等、むかしは、春秋の優劣を、風流心に分けかねけむを、いつしか、秋の色を、ひとへに、悲しとのみ見すて、秋の七草の、優にやさしき、紅葉の錦の、はでやかなるをも、大かたは、哀をさそふ媒とのみ詠めて、秋の心を、字のまゝに、愁と釋きつ。この故に、彼等の四季を歌ふや、前半は、常に、樂しけれど、後半は、常に、悲愴なり。これ、一つには、和漢の詩歌の、と

かくに、事物の客觀に泥みて、相を詠ずるを主とせるにより、また、二つには、中ごろ、佛教の渡り來て、無常變轉のことわりを敎へ、秋冬の景物をもて、その無常觀の好比喩となせるによるならめど、その觀の、とかくに、悲哀に偏したるは、事實なりげにや、秋の相は、蕭殺慘澹たる者なれど、その、洽く、萬物をして、豐熟せしむる精神は、頗る、樂觀を喚び起すべきにあらずや。秋の風の、淅瀝として、蕭颯たる、恐らくは、人をして、悚然たらしめむ。志かれども、その、所謂、小春日和の、脫々として、舒緩なる、などか、わが、歌人の快感をひかざりけむ。

和漢の詩人の、冬に對する感想は、更に、悲哀なり。されど、その「絕無即發菩提心」たる理を觀じ來らば、冬の落莫は、やがて、

無言の師にあらずや。この故に、バルンスは、特に、冬季にれいて、一種の悅樂を感じ、すなはち、その故をわきまへて、曰く、

余が冬を愛するは、多年の數奇不幸のために、わが心の悒鬱に傾けるによるならめど、志かも、その落莫たる頹廢と、凜烈なる風雪とは、暗に、余が心を高めて、偉大高壯なるものに、同感するに便ならしむ。覆載の間、いまだ、陰雲、空を掩ふ冬の日に、寒林の陰に逍遙し、北風の、怒つて、樹間に吼え、野にわたりて、怒號するを聞くばかり、心地よきことなし。冬は、余が無上の歸依節なり。余が心は、恍惚として、ひとへに、彼を渴仰せむとす。古詩人の言によれば、彼は、「風翼に駕して行く」とかや。余は、實に、冬にれいて、彼に熱誠を感ぜむ

とするなり。

と。徒に、悲哀を感ぜずして、畏敬を感じ、絶望せずして、歸依渴仰す。これ、我が詩文中に、殆ど、曾て、見ざるところなり。（坪内雄藏著文學その折々）

一九、浮世のさが（ナラハシ）二篇

一、人のなき跡

人のなきあとばかり、悲しきはなし。中陰（四十九日）のほど、山里などにうつろひて（ウツリテ移轉スヘキナリ）、便あしく、せばきところに、あまた、あひ居て、後のわざども、いとなみあへる、心、あわたゞし。日數のはやく過ぐるほどぞ、物にも似ぬ。はての日は、いと、なさけなう、たがひ

に、いふ事もなく、われかしこげに、ものひきたゝめ、ちりぢりに、行きあがれ（分レ）ぬ。もとのすみかに歸りてぞ、さらに、かなしきことは、多かるべき。「志かおかのことは、あなかしこ、跡のためぞ、忌むなることぞ」など、いへるこそ、かばかりのなかに、何かはと、人の心はなほ、うたて（情）ぼゆれ。年月經ても、つゆ、忘るゝにはあらねど、「去るもの（文選ニアリ）は、日々に疎し」と、いへることなれば、さはいへど、その際ばかりは、覺えぬにや、よしなしごと（コトナイイ雜談ナリ）といひて、うちもわらひぬ。からは、けう（フカキ）とき山の中にをさめて、さるべき日ばかり、まうでつゝ見れば、ほどなく、卒都婆も、苔むし、木の葉、ふり埋みて、夕の嵐、夜の月のみぞ、ことゝふよすがなりける。れもひ出てて、忍ぶ人あらむほどこそあらめ、そも、ま

たゝほどなくうせて、聞きつたふるばかりの末々は、哀とやは思ふ。さるは、あとゝふわざも絶えぬれば、いづれの人と、名をだにとらず。年々の春の草のみぞ、心あらむ人は、あはれと見るべきを、はては、嵐に咽びし松も、千年をまたで、薪にくだかれ、古き墳は、鋤れて、田となりぬ。そのかたゞに、なくなりぬるぞかなしき。（徒然草）

二、常ならぬ世

飛鳥川の淵瀬、常ならぬ世にしあれば、時移り、事去り、たのしび、かなしび、ゆきかひて、はなやかなりしあたりも、人すまぬ野らとなり、かはらぬすみかは、人あらたまりぬ。桃李、ものいはねば、誰と共にか、昔を語らむ。まして、見ぬ古のやんごとなかりけむ跡のみぞ、いとはかなき。京極殿、法成寺など見るこそ、志、とゞまり、事、變じにけるさまは、あはれなれ。御堂殿の作りみがかせ給ひて、庄園、れほく、寄せられ、わが御ぞうのみ、御門の御うしろみ、世のかためにて、行末までと、れぼしれきし時、いかならむ世にも、かばかり、あせはてむとは、れぼしてむや。大門、金堂など、ちかくまでありしかど、正和の頃、南門は燒けぬ。金堂は、その後、たゞれふしたるまゝにて、とりたつるわざもなし。無量壽院ばかりぞ、そのかたとて、のこりたる。丈六の佛、九體、いと、たふとくて、ならびれはします。行成大納言の額、兼行が書ける扉、あざやかに見ゆるぞ、あはれなる。法華堂なども、いまだ、侍るめり。これも、また、いつまでかあらむ。か

ばかりの名殘だになきところどころは、れのづから、礎ばかり殘るもあれど、さだかに、知れる人もなし。（徒然草）

二〇、古羅馬

目の前なりし霧は、全く、消えて、我が脚の下には、きはみなき野原見ゆ。我が頰を吹く風の溫かさにても、既に、この境の、ロシヤの外なることを知るべきに、野原のさま、我が故里のものには、似ざりけり。見れろせば、暗く、また、さびしく、一もとの草も、こゝには、はえずとれもはるゝに、こゝかしこに、湖の面の、鏡に似たるあり。遠く望めば、風なく、また、波なき野原なり。頭の上には、廣く、美しき雲の絶間より、大なる星、輝けり。いづくよりも、絶間なく、物の聲の、のぼりきて、人の眠を催すに似たり。

「こゝは、ポンチニの澤なり。聞ゆるは、蛙の聲、たち上るは、硫黃の氣なり」と、われを負ひて、飛びゆくエリス、さゝやきぬ。

「さては、ポンチニなりとか。いかなれば、われを、かゝるかなしきところに伴ひたる。とく、こゝを去りて、羅馬に導け」。余は、かく、いひし時、心の中の悲しさ、忍びがたきほどなりき。

「羅馬は、遠くもあらず。いざ」と、われを促したてゝ、ラチウムの道にそひて、飛びゆけば、澤をわたる老いたる牛は、短く曲れる角を戴きたる頭を擡げて、愚なれど、猛く見ゆる目をみひらき、暫く、あたりを見廻して、濕ひたる鼻を、高く、空中にあ

げ、聲あらゝかに息す。飛びゆくわれらをや見たりけむ。

「今は、羅馬にこそきたれ。見よ」。かく、勸められて、見れろせば、地平線のあたりに、黑き物あり。昔、神の作りたる橋か。されど、流の見えぬは、いかに。いかなれば、また、ところどころの斷えにたる。こは、橋にあらず、むかしの水道のなごりなり。こゝは、羅馬のカンパニアとて、世に聞えたる名所なり。かしこに、聳ゆるは、アルバンの峯なり。今昇らむとする月に、水道の穹窿（キウリウ）（高くたかき）と、山の頂とは、ひかりかゞやけり。

雲の通路を、たちまち、また、上りて、（前ヲ過ギセシモ）とある古蹟の前に來ぬ。墓か、溫泉か、さらずば、宮居なるか。はひまつはりたる、色黑き蔦かづらは、中に欝したる氣を洩さじとするにや。下の方に、喉を開きたるは、なかば、壞れたる堂なりけり。正しく、積み疊ねたる石垣よりは、古墓に似たる陰森の氣、たち上りたり。

エリスは、たかく、手を擧げて、「こゝなり。こゝなり。羅馬のむかし、その名きこえし英雄を、こゝにて、呼びたまへ」と、いひぬ。「そは、また、なにのために」。「たゞ、呼びたまはゞ、見ゆるものあらむ」。

余は、ためらはし、たゆたひしが、聲高く、「カイウス、ユリウス、ケーザル」と、三たび、呼びぬ。

この聲の、こだまに響きて、まだ、絶えぬほどに、あなや、これを寫し出さむとするに、力れよばず。はじめは、皷の音とれぼしきもの、微に、聞えて、極めて、遠き處ならずば、極めて、深き大

地の底にて、數かぎりなき人の、俄に、騷ぎ立ちたる如し。とみれば、空中に、うごめくものありて、古蹟の上は、暗うなりぬ。この時、わが面の前を、影の如きものゝ過ぎゆくあり。頭の圓きは、兜にやあらむ。尖りたるもの持ちたるは、槍にやあらむ。この兜の如く、槍の如きものは、月に映じて、青き光を放ちたり。この陰兵は、往きつ、還りつ、やうやうに、その數、加りて、怪しき力ありて、動す如し。この力は、大地をも動すやう見ゆれど、數知れぬ陰兵の影は、ぼろげにのみ見えて、一として、あざやかなるはなかりき。こは、いかに。むら立つ影は、色めきて、あとへあとへと、引かむとす。千萬人の口より聞ゆるは、「ケーザル來れり。ケーザル來れり」と、いふ聲。風に捲かるゝ木の葉の如

く、今まで見えし陰兵は、なごりなく、消え失せて、雷、ゐどろれどろしく、鳴りわたり、古蹟の後の方よりは、頭に、桂の葉の冠を戴き、色あをざめたる人の、眶を垂れたるが、出でたり。見れば、帝王の相なりけり。

この時のわが心、れもひ出すだに、れそろしさにたへず。この眼の開かむをり、この唇の開かむをり、わが弱き身の、いかでか、ことときれざらむ。

「エリス、エリス、疾く、われを伴ひて、還れ。このれそろしき羅馬を去れ。このれそろしき羅馬を去れ。」

「君の心弱さよ」と、つぶやき、エリスは、われをたすけひきて、虚空はるかに上るほどに、陰兵の高く呼ぶ聲、また、一たび、遠

く聞えて、脚の下、暗うなりぬ。（森林太郎著水沫集）

二一、寂光院

去ぬる七月九日の日の大地震に、築地もくづれ、荒れたる御所も傾き破れて、いとゞ、住ませたまふべき御たよりもなし。緑衣の監使、宮門を守るだになし。心のまゝに荒れたる籬は、繁き野邊よりもつゆけく、をり志り顔に、いつしか、蟲の聲々怨むるも、あはれなり。さるまゝには、夜も、やうやう、長くなれば、いとゞ、御寢覺がちにて、あかしかねさせ給ひけり。つきせぬ御物思に、秋の哀さへ、うちそひて、いとゞ、忍びがたくぞ思し召されける。何事も、みな、變りはてぬる浮世なれば、れの

づから、情をかけ奉るべき昔の草のゆかりも、皆、枯れはてゝ、誰、はぐくみ奉るべしとも覺えず。されども、冷泉の大納言隆房の卿の北の方、七條の修理の大夫信隆の卿の北の方より、忍びつゝ、常は、言問ひ申されけり。女院、そのむかし、あの人どものはぐくみにてあるべしと、つゆも、思し召し寄らざりしものをとて、御涙を流させ給ひければ、つきまゐらせたる女房達も、皆、袖をぞ濡されける。

この御住居も、猶、都近くて、玉桙の道行く人の、人目も志げければ、露の御命の風を待たむほど、憂きこと聞かぬ山の奥へも、入りなばやと思し召されけれども、さるべきたよりも、ましまさずある女房の、吉田にまゐりて申しけるは、「これよ

り北、小原山の奥、寂光院と申すところこそ、静に候へ」とぞ、申しける。女院、「山里は、物のさびしきことこそあんなれども、世のうきよりは、住みよかなるものを」とて、思し召し立たせ給ひけり。御輿などをば、信隆、隆房の卿の北の方より、御沙汰ありけりとかや。

文治元年九月の末に、かの寂光院へ入らせれはします。道すがらも、四方の梢の色々なるを、御覽じ過ぎさせ給ふほどに、山陰なればにや、日も、やうやう、暮れかゝりぬ。野寺の鐘の入相の聲すごく、わくる草葉の露ぞげみ、いとゞ、御袖ぬれまさり、嵐、はげしく、木の葉、みだりがはし。空かきくもり、いつしか、うちぞぐれつゝ、鹿の音、かすかに、音づれて、蟲の怨も、たえだえなり。とにかくに、とりあつめたるこゝろぼそさ、たとへやるべき方もなし。浦づたひ、島づたひせしかども、さすが、かくはなかりしものをと、思し召すこそかなしけれ。岩に苔むして、さびたるところなれば、住まゝほしくぞ思し召す。露むすぶ、庭の萩原、霜枯れて、籬の菊の、かれがれに、うつろふ色を、御覽じても、御身の上とや、われぼされけむ、佛の御前にまゐらせ給ひて、「天子、聖靈、成等正覺、一門亡魂、頓證菩提」と、祈り申させ給ひけり。いつの世にも、わすれがたきは、先帝の御面影、ひしと、御身に添ひて、いかならむ世にも、わするべしとも、思し召さず。

さて、寂光院の傍に、方丈なる御庵室を結びて、一間をば、佛

所に定め、一間をば、御寢所にまつらひ、晝夜、朝夕の御勤、常事不斷の御念佛、怠る事なくして、月日を送らせ給ひけり。かくて、神無月の中の五日の暮方に、庭に散りまく楢の葉を、ものの踏みならして、聞えければ、女院、「世を厭ふところに、何者の訪ひ來るやらむ、あれ見よや、志のぶべきものならば、いそぎまのばむ」とて、見せらるゝに、小鹿の通るにぞありける。女院、「さて、いかにや、いかにや」と、仰せければ、大納言の佐の局、涙をれさへて、

岩根ふみ、誰かはとはむ。楢の葉の、
そよぐは鹿の、わたるなりけり。

女院、この歌、あまりにあはれに、思し召して、窓の小障子にあ

七種寶珠
黄根の根、紫金、茎、銀、枝、瑪瑙、條、珊瑚、葉、白玉、華、眞珠、菓、

八功德水
浅隱、無臭、軟、輕、清、冷、甘、美、輕軟、潤澤、安和、除患、增益す。

そばし止めさせれはします。かゝる御つれづれの中にも、思し召しなぞらふ事どもは、つらき中にも、數多あり。軒に並べる植木をば、七重寶樹とかたどり、岩間に積る水をば、八功德水と思し召す。無情は、春の花、風に從ひて、散り易く、うかいは、秋の月、雲に伴ひて、隱れやすし。承陽殿に、花を弄びし朝には、風來りて匂を散し、長秋宮に、月を詠ぜし夕には、雲蔽ひて、光をかくす。昔は、玉樓金殿に、錦の志とねを敷き、妙なりし御住居なりしかども、今は、柴ひき結ぶ草の庵、よその袂も、志をれたり。（平家物語）

二二、こゝの志をり

花のうたとて、よみ侍りける、　西行法師

吉野山、こぞのしをりの、みちかへて、
まだ見ぬかたの、花をたづねむ。

山里に詣でて、よみ侍りける、　能因法師

山寺の、春のゆふぐれ、きて見れば、
いりあひの鐘に、花ぞちりける。

關路花を、　宮内卿

あふさかや、木末の花を、ふくからに、
あらしぞかすむ。せきの杉むら。

題しらず　源信明朝臣

ほのぼのと、有明の月の、月かげに、

紅葉ふきれろす、山れろしの風。

百首歌よみ侍りけるに、　藤原定家朝臣

見わたせば、花も紅葉も、なかりけり。
浦のとまやの、あきのゆふぐれ。

湖上冬月　藤原家隆朝臣

志賀の浦や、遠ざかり行く、浪間より、
こほりていづる、ありあけの月。

みちのくにまかりける時に、　能因法師

夕されば、しほ風こして、みちのくの、
野田のたまがは、千鳥なくなり。

父秀宗、身まかりての秋、寄風懐舊といふことを、よ

み侍りける、　藤原秀能

露をだに、いまは形見の、ふぢごろも、
あだにも袖を、ふくあらしかな。

定家朝臣の母、身まかりて後、秋ごろ、墓所近き堂に
とまりて、よみ侍りける、　皇太后大夫俊成

まれにくる、夜半もかなしき、松風を、
たえずや苔の、志たにきくらむ。

旅宿嵐といふことを、　有家朝臣

岩がねの、床にあらしを、かたしきて、
ひとりやねなむ。小夜の中山。

長月のころ、はつせにまうでける道にて、　禪性法師

初瀬山、ゆふこえくれて、宿とへば、
三輪の檜ばらに、秋かぜぞふく。

（新古今和歌集）

二三、待賢門のいくさ　その一

さる程に、六波羅の皇居には、公卿僉議あつて、清盛を召されけり。紺の直垂に、黒絲威の腹卷に、左右の籠手を差して、折烏帽子引き立てゝ、大床にかしこまる。頭中將實國をもつて、仰せ下されけるは、「王事もろき事なければ、逆臣滅びむこと、疑なし。たゞし、たまたま、新造の內裏なり、もし、回祿あらば、朝家の御大事たるべし。官軍、僞りて、引き退かば、凶徒、定めて、進

み出でむか。然らば、官軍を入れかへて、内裏を守護せさせ、火災なきやうに、思慮あるべし」と、仰せ下されければ、清盛、畏つて、「朝敵たる上は、逆徒の誅戮は、掌の内に候ふ間、時刻を廻すべからず。然れば、定めて、狼藉出來せむか。過失なからむ條こそ、難儀の勅諚にて候へ。さりながら、范蠡が、吳國を覆し、張良が、項羽を滅しゝも、皆、これ、智謀の致す所なれば、涯分、武略を廻して、禁闕、無異なるやうに、成敗仕るべし」と、奏して、出でられけり。主上御坐あれば、皇居の御固に、清盛をば留めらる。

大内へ向ふ人々には、大將軍は、左衞門佐重盛、三河守頼盛、淡路守教盛、侍士には、筑後守家貞、子息左衞門尉、主馬判官盛國、子息右衞門尉盛俊、與三左衞門尉景安、新藤左衞門家泰、難

波次郎經房、瀬尾太郎兼康、伊藤武者景綱、館太郎貞康、れなじき十郎貞景をはじめとして、都合、その勢、三千餘騎、六波羅を打ち出でて、賀茂河を馳せ渡し、西の河原に、控へたり。左衞門佐重盛は、生年二十三、今日の軍の大將なれば、赤地の錦の直垂に、櫨の匂の鎧、蝶の裾金物打つたるに、龍頭の冑の緒を締めて、小鳥といふ太刀を佩き、切斑の矢負ひ、重籐の弓持ちて、黄桃花毛なる馬に、柳櫻摺りたる貝鞍れかせて、乘り給へり。重盛、のたまひけるは、「年號は、平治なり。華洛は、平安城なり。我等は、平氏なれば、三事、相應せり。敵を平げむこと、何の疑かあるべき。たれか、こゝに、樊噲、張良が勇をなさゞらむ」とて、三千餘騎を、三手に分けて、近衞、中御門、大炊御門、大宮表へ打ち出

てて、陽明、待賢、郁芳門へ、押し寄せたり。

大内には、三方の門を鎖し固め、南面をば開かれたり。承明、建禮の脇の小門をも、倶に開きて、大庭には、馬ども、多く、引き立てたり。梅壺、桐壺、籬壺、紫宸殿の前後、とうくわう殿の脇の壺まで、兵、ひしと並み居たり。これ、皆、源氏の勢なれば、白旗二十餘流、うち立てたり。大宮表には、平家の赤旗三十餘流、さしあげて、いさみすゝめる三千餘騎、一度に、鬨を、どつとつくりければ、大内も、響き渡りて夥し。鬨の聲に驚きて、只今まで、ゆゆしく見えられつる信頼卿、顔色變りて、草葉の如くにて、南階を下られけるが、膝振ひて、下りかねたり。人なみなみに、馬に乗らむと、引き寄せさせたれども、太り責めたる大の男の、

大鎧は着たり、馬は大きなり、乗り煩ふ上、主の心にも似ず、逸り切つたる逸物なれば、つと出でむ、つと出でむと志けるを、舍人七八人寄つて、馬を抱へたり。放たば、天へも飛びぬべし。穆王八匹の天馬の駒も、かくやと覺ゆるばかりにて、乗りかね給ふ所を、侍士二人、つと寄つて、「疾く、召し候へ」とて、押し揚げたり。餘りにや押したりけむ、弓手の方へ乗り越して、伏し様に、どうと落つ。急ぎ、引き、起して見れば、顔に、沙、ひしと附き、鼻血流れて、見苦しかりけり。義朝、この體を見て、日頃は、大將とて、恐れ給ひけるが、はたと睨みて、「かの信頼といふ不覺人は、臆したりな」とて、日華門を、打ち出でて、郁芳門へ向はれければ、信頼も、鼻血れし拭ひ、とかくして、馬に搔き乗せられ、待

賢門へ向はれけるが、物の用に合ふべしとも、見えざりけり。

二四、待賢門のいくさ その二

左衛門佐重盛、五百餘騎をば、大宮表に殘し置き、五百餘騎にて押し寄せて、呼ばはり、給ひけるは、「この門の大將軍は、信賴卿と見るは、僻目か。かく申すは、桓武天皇の苗裔、太宰大貳清盛が嫡子、左衛門佐重盛、生年二十三」と、名のりかけゝれば、信賴返事にも及ばず、「それ防げ、侍士ども」とて、引き退く。大將の引き給ふ間、防ぐ侍士、一人もなし。われ先にと逃げければ、重盛、いよいよ、勇みて、大庭の椋の木の許まで、攻め附けたり。義朝、これを見て、「惡源太は、なきか。信賴といふ大臆病人が、待賢門を、はや、破られつるぞや。かの敵、追ひいだせ」と、宣ひければ、「承り候ふ」とて、驅けられけり。續く兵には、鎌田兵衛、後藤兵衛、佐々木源三、波多次郎、三浦荒次郎、須藤刑部、長井齋藤別當、岡部六彌太、猪俣小平次、熊谷次郎、平山武者所、金子十郎、足立右馬允、上總介八郎、關次郎、片桐小八郎大夫、以上十七騎、轡を雙べて、馳せ向ふ。大音聲を揚げて、「この手の大將は、誰人ぞ、名のれ、聞かむ。かく申すは、清和天皇九代の後胤、左馬頭義朝が嫡子、鎌倉惡源太義平と申す者なり。生年十五歳、武藏の大倉の軍の大將として、叔父帶刀先生義賢を伐ちしよりこの方、度々の合戰に、一度も、不覺の名を取らず、年積つて十九歳、見參せむ」とて、五百餘騎の眞中へ割つて入り、西より東へ追ひ

まくり、北より南へ追ひまはし、竪樣、横樣、十文字に、敵を、さつと、蹴ちらして、「葉武者どもに、目な掛けそ。大將軍を組んで擊て。櫨の匂の鎧に、蝶の裾金物打つて、黄桃花毛の馬に乘つたるこそ重盛よ。押し雙べて、組んで落ち、手捕りにせよ」と、下知すれば、大將を組ませじと、防ぐ平家の侍士ども、與三左衞門、新藤左衞門をはじめとして、百騎ばかりが中にぞ隔りける。惡源太をはじめとして、十七騎の兵ども、大將軍に目を懸けて、大庭の椋の木を、中にたて、左近の櫻、右近の橘を、七八度まで追ひまはして、組まむ組まむとぞ揉うだりける。十七騎に驅け立てられて、五百餘騎、かなはじとや思ひけむ、大宮表へ、さつと引く。大將左衞門佐は、弓杖突いて、馬の息を繼がせ給

ふところに、筑後守、つと參りて、「曩祖平將軍の、二たび生れ替り給へる君かな」と、向ふざまに、譽め奉れば、今一度驅けて、家貞に見せむとや思はれけむ、前の五百餘騎をば留め置き、新手五百餘騎を相具して、又、大庭の椋の木まで攻め寄せたり。又、惡源太驅け向ひ、見回して、いひけるは、「只今、向ひたるは、皆、新手の兵なり。但し、大將は、元の大將重盛ぞ。以前こそ洩すとも、今度に於ては、餘すまじ。押し雙べて、組んで捕れ、兵ども」と、下知すれば、勇みに勇みたる十七騎、われ先にと進みければ、今度は、難波次郎、れなじき三郎、瀨尾太郎、伊藤武者を始として、百餘騎が中に隔てたるに、事ともせず、惡源太、弓をば、小脇に搔い挾み、鐙踏ん張り、突立ち上り、左右の手を揚げ、「幸に、義

平、源氏の嫡々なり。御邊も、平家の嫡々なり。敵には、誰か嫌はむ。寄れや組まむ」といふまゝに、先の如く、大庭の椋の木の下を追ひ廻して、五六度までこそ揉うだりけれ。重盛、組みぬべうもなくや思はれけむ、又、大宮表へひいて出づ。惡源太、二度まで、敵を追ひまくり、弓杖突いて、馬に息を繼がせけるに、義朝、これを見て、須藤瀧口を以て、「汝が不覺に防げばこそ、敵、度々、驅け入るらめ。彼、速に、追ひ出だせ」と、いひ遣はされければ、俊綱馳せて、この由をいふに、「承り候ふ。進めや者共」とて、色も替らぬ十七騎、大宮表に驅けいでて、敵五百餘騎が中へ、面も振らず、割つて入る。引き立つたる勢なれば、馬の足を立てかねて、大宮を下りに、二條を東へ引きければ、「我が子ながらも、義平は、能く、驅けたるかな、あ、驅けたり」とぞ、譽められける。

二五、待賢門のいくさ　その三

大將重盛、與三左衞門景安、新藤左衞門家泰、主從三騎懸け放れ、二條を東へ引かれければ、惡源太、鎌田にきつと目合せて、こゝに落つるは、大將とこそ見れ、返せや」とて、追つ懸けたり。既に、堀河にて、追つ詰めけるが、弓手の方に、材木、多く、滿ちたるに、惡源太の乘り給へる馬、かたなつけの駒にて、材木にや驚きけむ、馬手の方へ蹶飛んで、小膝を折りて、どうと伏す。鎌田兵衞、延ばさじと、十三束取つて交ひ、能つ引いて、ひようと射る。重盛の射向の袖に、はたとあたりて、飛び返る。や

がて、二の矢を射たりければ、押附にちようと中りて、箙かつぎ砕けて、跳り返れり。悪源太、「これは、きこゆる唐皮といふ鎧、ごさんなれ、馬を射て、落ちむところを撃て」と、下知せられければ、又、能つ引いて、追ひざまに、筈の隱るゝ程、射込みたり。馬は、屏風を返す如く倒るれば、材木の上に跳ねれとされ、冑も落ちて、大童になり給ふ。鎌田、堀河を馳せ越えて、重盛に組まむと落ち合ふ。重盛、近附けては、かなはじとや思はれけむ、弓の弭にて、鎌田が冑の鉢を、ちようと突く。突かれて、ゆらゆる間に、冑を取つて、うち着つゝ、緒を、強くこそ、締められけれ。與三左衛門、馳せ寄つて、中に隔り、申しけるは、「漢の紀信は、高祖の命に代りて、滎陽の圍をいだし、終に、天下を保たせき。主辱

滎陽漢高祖楚項羽ト戰ヒテ詰ル、紀信東門ヨリ出デ曰ク漢王食盡キテ降ル ト其中ニ紀信、西門ヨリ脱シ紀信後焼キ殺サル

めらるゝ時は、臣、死すといふにあらずや。景安、こゝにあり、寄れや組まむ」と、いふまゝに、鎌田兵衛と、引き組んで、取つてれさへけるところに、悪源太、馬引きれこし、これも、堀河を馳せ越えて、重盛に組まむと、飛んで懸りけるが、鎌田をや助くる、大將をや撃たむと、思案しけれども、大將には、又も、寄せ合ふべし、正家を撃たせては、かなはじと思ひ、與三左衛門に落ち合うて、三刀刺して、首を取る。重盛は、憑み切つたる景安撃たせて、命生きて、何かせむとて、既に、悪源太と組まむとせられけるを、進藤左衛門馳せ來り、「家泰が候はざらむ所にてこそ、大將の御命をば捨てたまふべけれ」とて、わが馬を引き向け、中に隔てゝ、悪源太と、むづと組む。正家は、重盛に組まむと志

けるが、主を擊たせてはかなはじと、思ひければ、進藤左衞門に落ち重つて、首をかく。この間に、重盛は、虎口を遁れて、六波羅までぞ、落ちられける。二人の侍士なからましかば、助かり難き命なり。十二月二十七日の巳の刻ばかりのことなるに、一村雨、さつとして、風は、烈しく、吹きたりけり。鎌田が鞍の前輪にも、つらゝゐたれは、乘りかねけり。惡源太、これを見給ひて、「手形を附けて、乘れや」と、宣ひければ、打物拔いて、つぶつぶと、手形を切つてぞ、乘りたりける。鞍に手形を附くること、この時よりぞはじまれる。（平治物語）

前輪ノ両側ニ半円形ノ穿竹アリ之ヲ云フ

明治廿九年四月廿九日終

訂正中等國語讀本卷九　終

訂正中等國語讀本卷九

明治三十六年十一月廿四日訂正廿六版印刷
明治三十六年十一月廿七日訂正廿六版發行
明治三十七年八月十五日三十版發行

訂正中等國語讀本奥附

定價表
一ヨリ十マデ各貳拾六錢
附錄三拾錢

明治三十六年十一月廿八日
中學校用教科書部省檢定濟

不許複製

著者　東京市本郷區駒込淺嘉町七十八番地　落合直文
發行者　東京市神田區錦町一丁目十番地　三樹一平
印刷者　東京市神田區三河町二丁目十六番地　鈴木友三郎
印刷所　東京市神田區雉子町三十四番地　宮本印刷所

發行所
東京市神田區錦町一丁目（特電話本局二四三八番）　明治書院
大阪市東區備後町四丁目（特電話東四三番）　吉岡平助

關西專賣